

ベイビーステップ ハ
ルとナツ

ニヤン吉

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

テニス未経験者が今更投稿するベイビーステップ

主人公のなつちゃんに対する思いは一途

オリ主は色々と強すぎる

実力で言えばプロでもトップレベルのオリ主が未だに学生テニスの大会に出ている

理由はなんのか

作者がテニス未経験者という事もあり試合中の矛盾点等が出てくる可能性特大
基本は日常回にしたいですが、試合のシーンも書けるだけ書いてみます。

主人公紹介

清水春樹

身長192cm

体重88^{キロ}

鷹崎奈津の彼氏で幼馴染

2人の母親が同じ歳の幼馴染で物心つく前には既に一緒にいるのが当たり前
誕生日が奈津より1日早い10月22日

10人中8人がイケメンと振り向くレベル

見た目イメージ

手塚国光+不二周助÷2

プレイスタイルは鷹崎奈津に似た超感覚派の超攻め型があればカウンター型もある
ここは完全に本人の感覚

野生の勘レベル

例えるなら黒豹

(黒子のバスケ

青峰大輝をイメージ)

だが原作主人公の丸尾栄一郎よりもデータを取りながら試合を運び確實に守り勝つ理性的なスタイルも持つている

相手の動きからデータとその試合のパターンや流れを読んで未来が見えているかのような先読みを可能とする

でも丸尾栄一郎よほど頭が良くないため限界がある。

理性的な状態の時に見た相手の技をマネとは言えないレベルで模倣し自分の技にまで昇華出来る

(黒子のバスケ 黄瀬涼太とテニスの王子様の不二周助を合わせたイメージ)

相手によつて最善なスタイルを使うが基本は理性的なスタイルから入る

毎年冬には奈津と共にフロリダの超一流テニスクラブに留学し学んでいる

身体能力（10段階評価）学生男子評価 プロ男子

筋力 9 ?

脚力 10 ?

精神力 10 ?

戦術 9 （丸尾栄一郎は学生の間に10になる。） ?

ジャンプ力 10 ?

判断力 10 ?

勘

EX

?

経験

EX

?

勝負強さ

10

?

メインヒロイン

鷹崎奈津

身長 170 cm

体重 56 kg

清水春樹の彼女で幼馴染

2人の母親が同じ歳の幼馴染で物心つく前には既に一緒にいるのが当たり前に誕生日 10月23日

プレイスタイル等は原作同様

オリ主である清水春樹と毎年冬にフロリダに留学している結果原作より強い身体能力（10段階評価）学生女子評価

筋力 8

脚力 10

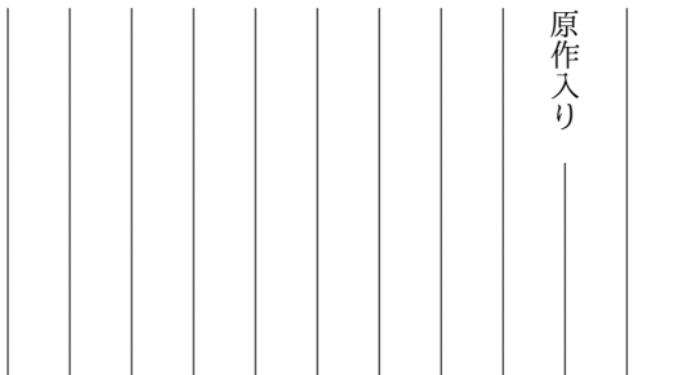
精神力 EX （清水春樹が試合を見に来ている時はEX+）

勝負強さ	経験	勘	判断力	戦術
10	1	0	9	不明
E				8
X				

目

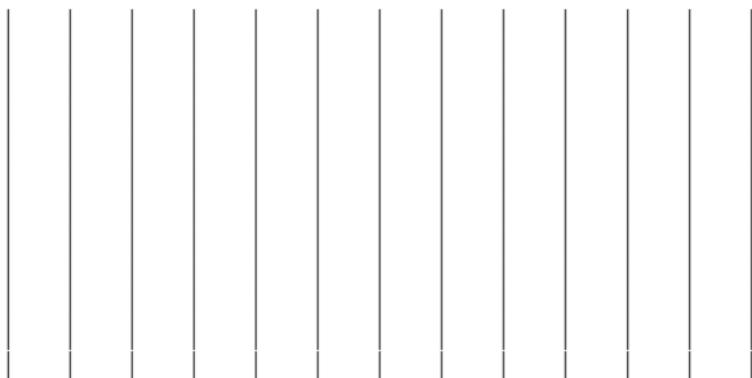
次

第12話 第11話 第10話 第9話 第8話 第7話 第6話 第5話 第4話 第3話 第2話 第1話



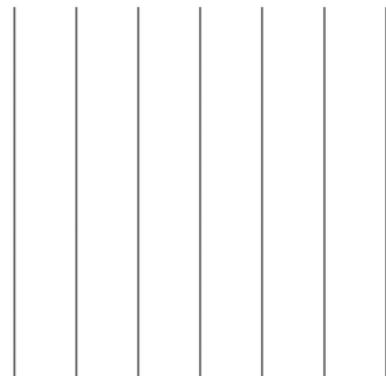
64 59 53 47 41 35 31 27 17 12 8 1

第25話 第24話 第23話 第22話 第21話 第20話 第19話 第18話 第17話 第16話 第15話 第14話 第13話



131 127 122 118 113 108 102 95 89 85 80 75 70

第32話 第31話 第30話 第29話 第28話 第27話 第26話



161 157 152 147 142 138 134

第1話

S T Cはテニスクラブとして強豪で知られている。

そんなテニスクラブだから休日ともなるとたまに県外の強豪テニスクラブから練習試合が入ることがある。

俺は明日は男子で五本の指に入る難波江優と

奈津は女子トップで俺の従妹の清水亜季と

試合をする事になつた。

そんな試合前日の授業後の下駄箱へ向かいながらの何ら変哲のない会話のはずだった

た

「なつちゃん。今日もS T C行くか？明日に備えて休んでもいい事になつてるけど。」

「行くよハルちゃん！どうせハルちゃんも行つて逞と試合形式の練習をするんでしょ？」

「今日は逞とはやらないぞ。なんなら俺がなつちゃんの相手をしようか？」
と俺が笑いながら奈津に言うと

「ホントに！やつたー。・・・それとお願ひなんだけど。」

と真剣な顔で俺を見てきた。

「次の試合ね。私は明日なんだ。」

「俺もだけどよ。」

「そうなんだけど。・・・亜季ちゃん対策をしたいんだ。今度こそ勝ちたいんだ。」

「亜季か。」

「うん。」

「従妹の対策か。」

「うん。」

「模倣は出来るがプレイスタイルがだいぶ違うんだけど。」

「わかってるよ。でも・・・今までの大会では同じプレイスタイル従兄妹同士の清水春樹と清水亜季つてなつてるでしょ？世間を騙せてるじやん。」

「まあいいかな。こういう時は彼女の為に頑張るさ。」

「ありがとう！大好きな彼氏のハルちゃん！さあ大好きなを付けたんだから私にも付けてね！」

「やだね。」

「言えよーブーブー」

と頬を膨らませて見せる大好きな彼女のなつちゃん。

そもそも恥ずかしくて大好きな・・・なんて付けられるわけねえよ。

と考えながら俺のとった手段は

身長差20cmあるため腰を少し曲げてなつちゃんの後頭部と腰に手を当てて少し抱くような形についてこつちの方が恥ずかしいけど耳元に顔を持つて言つて

小さい声で

「愛してるぜ奈津。俺にとつては今までも、そしてこれからも俺の愛する女は奈津だけだ。」

と囁く

今、放課後の下駄箱だからすげー恥ずいけどな！

囁いて少し力を入れて抱き締めるとなつちゃんも俺を抱き締めてくれる。この安心感はやつぱ、なつちゃんじやなきや味わえない

少ししてなつちゃんを少し離して周りを見渡すと

真っ赤になつたなつちゃんの顔と

周りの女子達の

「清水君に抱きしめて貰えるなんていいなー鷹崎さん。」

と男子達の

「リア充滅べ！」

「春樹を殺して俺も死ぬ！」

と物騒な声が聞こえるのだった。

s i d e 奈津

「まあいいかな。こういう時は彼女の為に頑張るさ。」

「ありがとう！大好きな彼氏のハルちゃん！さあ、大好きなを付けたんだから私にも付けてね！」

「やだね。」

「言えよーブーブー」

と私なりのちよつとした意地悪

ハルちゃんの顔を見ると少し困っているのがわかる。

1番古い幼馴染だからハルちゃんの考えている事はわかる
と思つていたのに

予想を遥かに超えた回答が私の耳元に帰つてきた。

身長差があるからハルちゃんは腰を少し曲げて

私の頭と腰に優しく手を添えて耳元に顔を近づけると

「愛してるぜ奈津。俺にとつては今までも、そしてこれからも俺の愛する女は奈津だけだ。」

とハルちゃんは耳元で優しく囁いてくれた

あ・あ・あ・アイシテル

愛

愛し

愛して

・・・・・ 愛してる！

ハルちゃんから愛してる！

あのハルちゃんが・・・試合中のテンションなら言つてくれそうなセリフを普段は恥

ずかしがり屋のハルちゃんが・・・愛してる！

ハルちゃん絶対に今、顔が真っ赤だよ！

でもそれよりも

今は間違いなく不意打ち気味にこんな・・・愛してるを貰つた私の方が顔は真っ赤だ

よね。

今、放課後の下駄箱だよ！

周りに人がいるんだよ！

更にハルちゃんは囁いた後に少し力を入れて私を抱き締めてくれた
反射つて怖いな、私も抱きしめちゃつた

学校なのに

学校なのに

学校なのに

凄く恥ずかしいのにこの安心感はやっぱりハルちゃんじやないとね

少ししてハルちゃんが私を少し離して周りを見渡すと

学校だということを思い出して恥ずかしそうにしているハルちゃんと

周りの女子達の

「清水君に抱きしめて貰えるなんていいなー鷹崎さん。」

と男子達の

「リア充滅べ！」

「春樹を殺して俺も死ぬ！」

という声がよく聞こえた

ここで私の大好きな・・・違うな。

1番愛してる彼氏は凄いんだよ！って皆に自慢したいけど恥ずかしいからいいよね、

と思う私がいた。

s i d e 春樹

愛してる。

・・・やべー！

なんであんな事を言つてからなつちゃんを抱き締めたんだ！
抱き締めたのは照れ隠しの為

それはわかつてる

でも・・・ここでやる必要は無かつただろー！

と考えながら俺は奈津が靴を履き替えるのを確認してから奈津の手を掴んでこの雰
囲気から逃げるようSTCに向かうのだつた

第2話

S T C に着いて練習用のウェアに着替えて自販機の横でペットボトルのスポーツドリンクを片手に少し待つとなつちゃんが後ろから

「ハルちゃん！」

と声を掛けってきた。

それを見て俺が

「アップするか。」

と言つてコートに入る。

2人でストレッチを始めるとなつちゃんが

「もうすぐ中学最後の冬だけどまたフロリダに短期留学するの？」

と聴いてきた。

「親父も母さんも説得してあるから行くよ。」

と答えるとなつちゃんは笑顔で

「そう言うと思って私もお父さんとお母さんを説得して許可もらつたんだ！」
と言つて俺にピースをしてくる。

「これで8年連続の短期留学だな。」

「そうだね。そうちやんとまた試合したいね。」

「そうだな。また勝ちに行くか。」

と言うとなつちゃんが

「私ね。ハルちゃんとそうちやんの試合が一番好きなんだ。」

「なんでだ?」

「私にとつてもハルちゃんととつてもそうちやんにとつても大事な幼馴染だしハルちゃんとそうちやんの試合を見てるとね・・・日本の学生テニスより活き活きして見えるんだよ。なんて言うのかな。・・・心と身体が精一杯楽しんでるみたいな感じ。」

となつちゃんの（心と体が精一杯楽しんでるみたいな感じ）

このセリフにはすごい覚えがあるのだ。

初めてそうちやんと試合をした時は相手にならなかつた。

なのに試合をしていくうちに本当にライバルと呼べるようになつて去年の大会まで
切磋琢磨してきた。

そして去年の最後の大会の後そうちやんは

「フロリダへ行つてプロになる!」

そう言つて去年の秋にフロリダへ飛んだ。

そして去年の冬のフロリダの短期留学の時の試合。

今までで1番の試合をした。

フロリダへ飛んで2ヶ月で相当強くなつた。
だから俺もそうちやんに負けない様に練習に食事に気を付けてしつかりとレベル
アップしてきた。

その結果

日本の学生にライバルと呼べる選手がいなくなつた。

なつちやんはそんな時俺に言つた。

「いつか・・・近い内にハルちゃんとそうちやんに勝てる人がきっと出てくるよー！」
って俺に言つてくれた。

まだ出て来てないけど。

でもなつちやんの言葉には何か力がある。それは俺が1番知つていて。

近い内にきっと新しいライバルが出てくると。

そんな事を考えている間にストレッチを終えてコートの周りのランニングに入る。

「ハルちゃん！」

「なんだ？」

「冬のフロリダ。精一杯楽しんで一緒にもつと強くなろうね！ハルちゃんなら近い内に

きっと日本だけじゃなくて世界でも1位になれるからさ」と俺に、俺の大好きななつちゃんの満面の笑みを見てくれた。

3話 原作入り

あれから暫くが経ち

いつの間にか高校に入学してから2週間が経つていた。

俺のクラスには変わった奴がいる。

名前は「丸尾栄一郎」あだ名がエーちゃん

授業の最後に出される先生の無茶振りな問題も難なく答えられる勤勉と言うかとにかくおかしい奴。

そんな日の昼休み

高校ではクラスが別れてしまつた彼女のなっちゃんが突然扉を開けてクラスに入つて來た。

「ハルちゃん！」

と言う声掛けに周りのクラスメイトは

「ハルちゃん？」

「誰だよ入つて來たの？」

「2組の鷹崎ナツだよ。」

「すっげーかわいいな。」

と言う声を聞きながら

俺のなつちゃんの元へ向かう。

「なつちゃん。流石に教室でハルちゃんは無いよ。」

「えつー！だつてハルちゃんはハルちやんだもん。」

「まあいいけどさ。で、要件は何？」

「ちよつとー！その態度は彼女に対して酷くない？」

「酷くないよ。それで要件は？」

「そうだった！」

お願い！！日本史のノート見せてつ

次小テストらしいの!!」

「まじか!?」

「貸してやりたいけど俺のノートって見づらいからな。」

と俺がクラスメイトを見渡すと

「なつちゃん。少し待つて。」

「うん。」

なつちゃんの返事を聞き俺はエーちゃんの元へ行く。

「エーちゃん。」

「どうしたの春樹くん。」

「まだ日本史のノートのコピーって残ってる?」

「どうかな。」

そう言つてエーちゃんは机の中と鞄の中を確認してくれたが

「ごめん今まはコピーをきらしてるみたい。」

「そうか。」

とエーちゃんと話していると後ろになつちやんが来て

「ハルちゃん。この人となんの話をしてるの?」

「ああ。紹介するよ。こいつは丸尾栄一郎。一応皆からはエーちゃんって呼ばれてるんだ。それでエーちゃんノートのコピーがあればと思つたんだけどな。」

「エーちゃんノート?」

「はい影山説明。」

「人使いが荒いな春樹。」

「いいだろ。たまには世のため人の為になれ。」

「はいよ。えっとエーちゃんノートってのは細かく書かれすぎていて更に要点が纏められ過ぎて いるわかり易すぎるキモイノートです。」

「わかり易すぎてキモイノート？ ハルちゃんはコピー持つてるの？ さつきの反応からして？」

「持つてるよ。」

俺はそう言つて机の中にあるエーちゃんノートのコピーが纏めて止められているファイルを取り出してなつちゃんの前に持つて行く。

「これだよ。俺となつちゃんはテニスで出席出来ない日とかもあるからエーちゃんに毎回貰つてるんだ。」

そう言つてなつちゃんにファイルを手渡すと

「ホントにこのノートを作つた人の目の前で言うのもなんだけどキモイね。」

「だろ。でもエーちゃんノートのお陰で勉強も遅れずに済んでるからな。エーちゃんには感謝だよ。」

「そんな事ないよ。春樹くんは元々勉強が出来てるからこのノートを見なくとも多分大丈夫だよ。」

「エーちゃん。テニスの試合でもその多分大丈夫を確実に大丈夫にする事が1番大事なんだぞ。」

「ハルちゃんのテニスに多分大丈夫って言葉は入る余地無いもんね。」

たり前だ。」

「完璧主義者なのに勘で動く時もあるよねーだ。」

「常に勘で動くなつちゃんには言われたくないな。」

「あーそれを言うなー」

とちよつとしたお巫山戯がクラスの中で起こつてしまつたのは無かつたことにして欲しいけどな。

でもこの時は思いもしなかつた。

このエーちゃんがまさかテニスをしかも俺となつちゃんと同じ強豪STCで始めるとは。

第4話

s i d e 丸尾栄一郎

お母さんに行くように言われて来てみた南テニスクラブ
室内のコートも充実していて雨でもOK

確かに週一には丁度いいかもしないと思つていると
鷹崎さんと春樹くんが試合をしていた。

それを見てつい大声をあげてしまった。

「ん？」

「どうしたなつちゃん？」

「今なんか聞こえなかつた？」

「聴こえたな。」

何故か隠れてしまつた。

というかなんでここに鷹崎さんと春樹くんが？

「まあいいや。再開しようぜなつちゃん。」

「やろやろーハルちゃん！今度は左手でお願い。」

「了解！」

と聞こえた後また打ち出した音が聞こえた。

鷹崎さんもだけど特に春樹くんは今打っている人達の中で1番うまいのが素人でもわかるし俺よりも小さい子達もいる！！

しかもここにいる人達は外の人達よりずっと上手いのがわかる！
レベルが違う。

と思つていると

「おい！」

と下から声が聞こえて反射的に

「はい？」

と答えてしまつた。

「てめー

他のクラブのスパイだろ」

「スパイ！？」

「スパイ・・・じゃないよ？」

と伝えると

「じゃー

変質者だな。」

と言つて

大きな声で

「コーチイー変なオジサンがいるうー!!」

「僕はスパイでも変質者でもなければオジサンでもないっ!!」

と答えるとこの子がコーチを呼んでいて

ちゃんと誤解を解こうとすると

ネットから鷹崎さんと春樹くんが出てきて

2人して驚いたように

「エーちゃん!?」

と声を出してコーチの人も

「エーちゃん?」

と聞き直す。

春樹くんが場を落ち着かせて

「エーちゃん。一応自己紹介してくれ。」

「大杉高等学校1年丸尾栄一郎です。」

「俺と同じクラスで」

「私の隣のクラスなんだつ」と言うと小さい子が

「なるほどなつちゃんのストーカーか」と小さい子が言うとコーチの人が

「コラッユウキくんつ」と言つてくれて

一応

「ほんつとそんなんじやありませんから。」

と答えているとコーチの人が確かユウキくんに

「ほらつ打つといで」

と言つてコートへ連れて行つてくれた。

そして鷹崎さんが

「それでエーちゃん

今日はどーしたの？」

と聞かれて

「あ、え・・・と

なにか運動を始めようと思つてさ・・・運動不足解消に」

と答えると

春樹くんが

「なんだよそれ」

と笑いだし

鷹崎さんが

「変なのーっ」

と笑いだした。

小さい子がコートに戻つたらコーチの人が戻つて来て

「テニスに興味があるなら無料体験できるよ?」

やつてつてみたら?」

と言つてくれたものの

「でも今日は何の準備もしてないので」

と答える。

すると

「ラケット・シューズなんならウエアも貸し出すよ!」

と言われて少し迷うとコーチの人があ

「迷うぐらいならやつてみよっねっ!!」

と押し寄せてきた。

それから少ししてウォーミングアップが始まるも途中でバテて倒れてしまった。
目が覚めると周りが打ち始めていて
さつきの小さい子が

「ダッセエなお前！」

と言われて何も言い返せなかつた。

少ししていやダメなんだと思つて帰ろうとすると春樹くんと鷹崎さんがあつた。

正直今一番会いたくなかったペアだつた。

春樹くんが手を貸してくれて立ち上がると鷹崎さんが

「もう大丈夫?」

と聞いてきたので

「だ・・・大丈夫だよっ」

と答えると

2人は目の前でほつとした様子を見せて

「よかつたあ」

と言つて鷹崎さんが

「みんなで心配しちやつたよ。」

と言つてくれてそれに続いて春樹くんが

「どこに行くんだ？便所か？」

と聞いてきたから

「そろそろ帰ろうと思つてね。

やらなきやいけないことあるし」

と答えると鷹崎さんが

「そつか」

の後に春樹くんが

「なんだ？勉強か？」

「え？うんまあね」

と答えた。

そこから少し3人で話していると俺は凄いって言つてくるようになつた。

そんな中で鷹崎さんが

「じゃあさエーちゃんは

何してる時が1番楽しいの？」

と聞かれた。

「うーん確かにそう言わると鷹崎さんや春樹くんみたいに夢中になれる趣味はないなあ」

と答えた。

すると突然俺は吹き飛ばされか感覚があつて直ぐに胸ぐらを春樹くんに掴まれているのに気付いた。

いつもは優しい春樹くんの地雷を踏み抜いてしまつたらしい。

s i d e 春樹

「うーん確かにそう言わると鷹崎さんや春樹くんみたいに夢中になれる趣味はないなあ」

趣味。

その言葉を聞いた途端に俺はエ一ちゃんを押して倒した後直ぐに胸ぐらを掴んでいた。

大声を出すと周りに迷惑になるから出来るだけ小さい声で
一度しつかりと息を吐いて

「お前には俺達のテニスが趣味に見えるのか?」

「えっ？ 違うの？」

「てめえは・・・いや。お前に言つても無駄だな。」

そう言つて俺は上着を着て外に走りに行く。

そして走つてる間終始あの「趣味」と言われたのが頭に残り続けていた。

s i d e 奈津

「ねえエーちゃん。なんでハルちゃんがあんなに怒つたのかわかる？」

と聞くとエーちゃんは首を横に振る。

「ハルちゃんはね。もうプロになるだけの実力があるし世界のランキングにも載つてから実質プロ選手だね。」

「春樹くんが実質プロ。」

「うん。そうだよ。そして私も一応プロを目指してるからさ。」

ハルちゃんの言いたかつたことはここにいる人は現実的かどうかは別として皆必死に練習してプロを目指してるって事が言いたかつたんだよ。」

私はそう言つて最後にエーちゃんに

「私がハルちゃんにフォロー入れとくから心配しないでねえー」

と言つてハルちゃんとお揃いのジャージを着てハルちゃんが来るのを入口で待つのだつた。

s i d e 丸尾栄一郎

鷹崎さんの言つていた「プロ」

テニスのプロつて

テニスで生活していくつてことだよな
ず一つとやり続けるつてことだよな

「テニスつてそんなに楽しいのかな」

俺はそうハツキリと思つた。

少しするとコーチの人が戻つて来て話を聞くと

ここは世界に通用する選手を育てる環境によつてプロも多く出している名門のクラ
ブチームらしい。

少しして帰る時にもう一度来よう。

そう思つてコーチの人には

「あの・・・体力つけるにはどうしたらいいですか?」
と聞くと

「そうね

とりあえずは走ることじゃないかしら」と教えてくれた。

第5話

s i d e 春樹

ランニングをしていると少し落ち着いてきた。

冷静になるとやつちまつたとすぐ思う。

一度水分補給と思つて自販機の所に向かうと入口の所にペットボトルを持ったなつちゃんがいた。

「ハルちゃんがそろそろ1周終わる頃と思つたから飲み物買つといたよ。」

「ありがとう。悪いなさつきは。かつこ悪い所を見せた。」

「いいの。あの怒つたのだつてハルちゃんの為じやなくてSTCの皆の為でしょ?」

「そうだな。去年のライバルがいないと腐つていた時、なつちゃんは俺を近くで言葉でプレーの上達で支えてくれてこここの皆だつてどんどん上達してくれてここにいる皆でギリギリまで諦めずに最後までプロを目指そう! そう言つていた皆の意思がエーちゃんの「趣味」の一言に留められるのが我慢出来なくてな。」

「うん。」

「正直、あそこであんな事しても意味無いのにな。」

と下を向いていると横からなつちゃんが俺を抱き締めてくれた。

「大丈夫だよ。この事を皆に言つたとしてもきっと何なもならないよ。寧ろこここの意志を再確認する為のいい機会にできたと思うよ。」

と俺をなつちゃんなりに慰めてくれた。

「なつちゃんと付き合い始めてから弱い所沢山なつちゃんに見られたな。・・・失望した

か？」

「まさか。

去年のハルちゃんの言葉を1つ借りるけど。

愛してる人の弱い所つて愛おしく感じるんだよ。

それにそんな事を言つたら私なんてもつと沢山ハルちゃんに弱い所を見せてるもん。中学最後の大会で亜季ちゃんに負けて泣きたくなつてる時とか他にも色々泣きたくてもなかなか泣けない時はハルちゃんが私を抱き締めて胸を貸してくれて泣いてたりハルちゃんに怒鳴り散らしたりしたからね。ハルちゃんは私に失望した？」

「もつとなつちゃんの事が知れて嬉しかった。」

「でしょ？」

「そうだな。

それとなつちゃん。1つ頼みがある。

無理を承知で言うからな。」

「うん。」

「答えは直ぐには求めない。

俺達が高校卒業すると共に俺と一緒にフロリダへ移住してくれないか。」

「テニスに専念する為?」

「そうだ。」

中学最後の冬の短期留学の時、そうちやんは俺と本当にギリギリの戦いをした。俺は高校卒業と同時に人生の全てをなつちやんとテニスだけに使いたいと思ってる。」

「高校卒業と同時にフロリダ。」

そこでハルちやんは人生の全てを私とテニスに。」

「その覚悟だ。」

「人生の全てをつてどこまでが全て。」

「なつちやんと一緒にいない時間は睡眠を覗いてテニス。」

それ以外はなつちやんとの時間に当てるよ。」

「私が高校卒業と共にプロになれるとは限らないんだよ。」

「なら俺が今までの賞金とかこれから稼ぐ賞金でフロリダのテニスクラブへ通わせるよ。もしくは俺の専業主婦?」

「私もプロになりたいからね。今のハルちゃんの話を聞いて決心したよ。私もプロになる。今度は目指すんじやなくて一緒にプロになる！」

「そうか。俺もなるからな。・・・それと今週の日曜日にそうちやんが一度実家に帰つてくるそうだ。三浦コーチには話してあるんだがそこで俺はそうちやんと試合をする事になつた。見に来ないか？」

「行く！絶対に見るよ！」

なつちやはそう言つて俺の腕に抱きついてきた。

第6話

s i d e 春樹

日曜日。

そうちやんが日本に帰つてきていてSTCにも来た。

俺と全力の試合をする為だ。

「久しぶりだな爽児」

「そうだな。春樹」

と言葉を交わすと横からなつちやんが

「今日は三浦コーチに変わつて私が審判やるからね。」

と言つていた。

サーブは俺からのスタート。

いきなりツイストサーブを打つて俺は爽児からサービスエースを取り

2本目はアンダーのカットサーブをワイドに

上手くサーブが爽児から逃げていきましたやサービスエース

3本目はセンターにフラットサーブを打つも爽児は難なく追いつき反対に力のある

リターンを返してきた。

でも回転がトップスピンである事を確認すると追いついて直ぐにツバメ返しで点を取りあと1回。ポイントを取ればこのゲームは俺の勝ちになる。

油断はしない。

1回は失敗しても言い訳だしコントロール度返しで全力のフラットサーブを打つ。
がギリギリ外れているらしいな。でもそれならと俺はアンダーのカットサーブをワイドギリギリに打つ。

これに追いつき爽児は何とかリターンを返したように見えたがパワーショットが俺の逆をつけ。ポイントを取られてしまう。

そうして俺は思った。

やっぱ爽児を相手に考えながらのテニスだけでは勝てないと。

そう俺の勘が言つていたから1度目を閉じてボールを2回コートにつく。

そこからは試合中の事は殆ど覚えていないがサイコーに楽しかった。それだけは覚えている。

s i d e 爽児

試合は結局負けちまつた。

7-5

5-7

9-7

で春樹の勝ちだ。

あいつサードもそうだけど技が増えすぎだろ。

やつぱり春樹はこうでなきやな。

でもやつぱり春樹の1番凄いところは目を閉じてからの型に当てはまらないフォームと組み立てのスタイルだ。

今日は集中しきれていなかつたのか時々春樹の言い方だと理性型のプレイが出てきたからそこを攻めて接戦に見せられたけど直感型の時の春樹はどんなフォームでも打ち返しくる。

抜けたと思つても抜けなかつたからな。

そもそもなんだよ。ネットでのボレー対決で逆をついたと思つたら手を後ろに伸ばして更に逆をついてくるつて。

やつぱり春樹はサイコーだな。

s i d e 奈津

ハルちゃんとそうちやんの試合はやつぱり1番私は面白いと思う。

それにもうそうちやんがフロリダへ行つてプロになつてから実力付けすぎ!

そしてそれに勝つちやうハルちゃんも凄い！

なんて言うんだろう。私も置いて行かれたくないなって改めて思つたよ。

試合が終わつてから私はハルちゃんとそちやんの間に立つて

「2人とも！凄い試合だつたよ。お疲れ様！」

つて本心から言えた。

そして改めて思う事をあつた。

本当はハルちゃんもプロでもう試合に出たいんじゃないかと。

s i d e 三浦コーチ

これが本当に16歳の子達の試合なのだろうか。

そう疑問に思わずに入れなかつた。

爽児の最後まで衰えることの無かつた速さはスタミナの多さを物語つている。

そして春樹のサーブやリターンは春樹らしい細さと荒々しさがわかる。

2人はこの試合の間にも成長していた。

第7話

s i d e 丸尾栄一郎

「あついたいた！」

ハルちゃん！

エーちゃん！」

「?」

「どうしたんだなつちゃん？」

「森本コーチからエーちゃんに伝言があるのとハルちゃんに逢いたくて来ちゃつた。
と鷹崎さんが春樹くんに言うと周りのクラスメイトが

「春樹にあいたかつただと」

「おい！春樹！どういう事だ！」

「皆の鷹崎さんとどういう関係だ！」

と皆して春樹くんに質問する。

それに対しても春樹くんは一言当たり前の様に答える前に鷹崎さんの元へ行き手を
取つて

「ちよつと一ハルちゃん。どうしたの？」

「もう皆知ってると思つたんだけどな。まだ理解出来ないみたい……理解しようとしないみたいだから見せつけようと思つてね。」

と2人が話し終えるといきなり春樹くんが鷹崎さんにキスをした。

それを見て男子達が

「…………あー！」

と叫び女子達が

「…………キヤー！」

と大声で叫んだ。

悲鳴のように。

その後すぐに男子達が

「我ら大杉高等学校のアイドル鷹崎さんが」

「テニス馬鹿の春樹と！」

「キスだと！」

「確か鷹崎さんもテニスやつてるよな！」

「鷹崎さんはテニスをやつてるから春樹が好きなのか！」

「俺も今からテニスを始めるか！」

と

女子達が

「春樹くんが鷹崎さんにキスしたよ！」

「春樹くんと付き合ってるなんて羨ましいなー」

「確かにテニスも凄いんだよ！」

「そうなの！」

「私は春樹くんに手取り足取りテニスを教わりたいかも。」

と言つていた。

そしてそれを最後まで聞いていた春樹くんが

「おい男子達。」

と低い声で言うと

影山が「なつなんだよ春樹。」

と答える。

「もしなつちゃんに手を出そしたら全力でボディにフラット決めるからな。」

と言つても周りは

「ボディ？」

「フラット？」

とわからないみたいだ。

俺もまだわからないし少し調べてみよう
と思っていると影山が

「春樹。ボディとフラットってなんだ？」
と聞いていた。

ナイス！影山！

と思つていると鷹崎さんが春樹くんに変わつて答えていた。

「ボディって言うのわね、相手の身体に目掛けて打つ事だよ。フラットは一番力が入る打球だから凄く痛いね。ちなみにハルちゃんのフラットは日本でのプロ選手を含めても五指に入るつて言われてるくらい凄いから余計に痛いと思うよ。」

と答えてくれた。それに男子の中の1人が

「ちなみに春樹のフラットはどのくらい痛いんですか？鷹崎さん。」

と聞いていた。

「ハルちゃんのフラットの最高記録は何キロだっけ？」

「220キロだな。でもコントロールを考えると200キロ位だな。」

と春樹くんは平然と答える。

それに対しても男子達は

「200キロってどの位だ?」

「野球でこの速さは無いぞ。」

「新幹線とどつちが速い?」

「新幹線だと思う。」

「でもテニスボールつて軽いから案外痛くないんじや?」

と言うと春樹くんがカバンからラケットとボールを取り出して笑顔で、でも明らかに怒りながら

「1発食らつてみるか?」

と言っている。

皆は首を横に振つてゐるけど。

氣を取り直して

「鷹崎さん。またノートのコピーですか?」

と聞いてみると

「ちがうちがう。森本コーチが、もう一度無料体験に來てもいいって言つてたから。」

「それだけ?」

「あと昨日私が言つた事とハルちゃんが怒つた事を覚えてる?」

「昨日?」

あーあの「プロを目指して」ってやつ?」

「なつちゃんは俺が走ってる間まだそんな事を話していたのか?」

「あそこでハルちゃんがエーちゃんを張り倒した挙句に胸ぐらを掴んでいたからでしょ。もおー」

と黒板の前で話していた。

「きっとエーちゃんも、始めてみればわかるようになるから。」

「まあ始めるなら始めてみればいいけど今から始めてもし「プロを目指す」って決める事があるなら、生活の一部じゃなくて生活のメインにする必要があるけどな。まあまた無料体験に来いよ。それと昨日は悪かったな。」

「いや。それはこっちが無神経過ぎたから。」

「まあいいけどさ。なんにせよまた来いよ。歓迎するから。」

そう言つて春樹くんはなつちゃんを隣の教室だけど送つて行つた。

第8話

s i d e 春樹

放課後になり教室になつちゃんを迎えて行くと
なんか女子達に囲まれた。

「なにがようなのが？」

と聞くと

「確か清水春樹くんだよね。」

「そうだよ。何か？」

「去年のプロのテニスの大会に出てなかつた？」

と聞いてきたのでなつちゃんの方を向くと

ごめんとジエスチャーされた。

仕方ないと思いつつ答える。

「出てたよ。それで？」

と答えると周りで

「やつぱりー」

「春樹くん凄い！プロだよ！プロ。」

と周りから色々聞こえてくる。

俺のクラスメイトよりも俺の事を隣のクラスが知つてるのはどうなんだと思いつつも情報源であろうなつちゃんの方を見る。

するとなつちゃんが

「皆（めん）ねーこれから私とハルちゃんはテニスクラブに行かないと行けないからまたね。」

と言つて俺の手を掴んで引っ張つてくれた。

「すまん。助かつた。」

「私も彼氏いるかつて聞かれて同級生で去年のプロのテニスの試合に出ててテレビにてたよつて言つたら「それつて隣のクラスの清水春樹くんだよね！」って言つてきてさ困つたよ。アハハは。なんかゴメン。」

「気にするなよ。俺はなつちゃんの自慢出来る彼氏になるだけだから。」

「なら私はハルちゃんの自慢の彼女になるね。」

と答えてきた。

「なつちゃんはもう既に自慢の彼女だよ。」

と小声で聞こえないように言つたはずなのになつちゃんには聞こえていてらしく

「ありがとうハルちゃん！」

と言つて俺に抱き着いてきた。

下駄箱に着くと逞がいた。

一応先輩だけど

呼び捨てだな。

「珍しいじやん逞」

「春樹。俺は一応先輩なんだが？」

「タクマ、それは凄い今更な気がするよー」

と3人で話しながら校門に向かう途中

視線に気付く。

視線の先を見るとエーちゃんがこつちを見てあわあわしていた。

なつちゃんも気付いていたようだ。

すぐに隠れただけど。

エーちゃんが無料体験に来てから1週間後。

またエーちゃんが来た。

「また来たかエーちゃん。」

「うん。前回はまともに撃てなかつたから今回こそわね。」

「そうか。頑張れよ。」

俺はそう言つてなつちやんの元へ行く。

アップを終えてAコートに入るとエーちゃんが通路で森本コーチといふ。

s i d e 丸尾栄一郎

ラケットの握り方からと思つてゐるとコーチの人に連絡が入り他のコートの見学をしているように言われた。

Aコート? に行くと

春樹くんに鷹崎さんとあの先輩が3人でいた。

3人が交代で練習している。

よく見ると鷹崎さんと春樹くんは同じ打ち方をしている。
しばらくして

「ナイスサーブタクマ。」

「春樹に言わると世辞に聞こえるな。」

「お世辞じやないよ。凄いナイスサーブだよ。調子いいじゃんタクマ。」
と話していた。

すると鷹崎さんが俺に気付いて春樹くんの手を掴んで

「どうしたんだなつちゃん。」

「エーちゃんが来てるよ。テニスやる事にしたの？」

と聞いてきた。

「えつ・・・あ・・・まだ申し込みはしてないけど」

と逃げ腰で答えた。後ろにいる先輩が怖いんだもんと思つていると

「エーちゃんコーチは？」

と聴いてくると春樹くんが

「タクマ。エーちゃんに威嚇するのはやめろ。」

つて言うと鷹崎さんが気付いて

「あつタクマ。」

と言つていた。

「まあいいや。

エーちゃん。一応このでかいヤツの・・・俺と背が変わらねーな。タクマの紹介をするよ。

江川逞。同じ高校の2年だ。

でこのヒヨロヒヨロが俺と同じクラスのエーちゃんこと丸尾栄一郎だ。
タクマは威嚇をやめる。

一応俺となつちやんの友達だ。」

と言うとタクマさんが顔を近付けて

「ふーん、友達ねえ。」

と言つてきた。

時

春樹くんが

「エーちゃん。 1つ頼みがあるんだけどいいか?」

「何かな?」

「サーブ練習の時だけでいいコートに入つてくれねえかなあ

入るだけでも練習になるからさ。打ち返せるなら打ち返してもいいしな。」

とビックリ仰天な事を春樹くんは言い出すのだった。

第9話

s i d e 丸尾栄一郎

なんかサーブ？の練習相手になつていてる。

春樹くんとタクマさんのサーブは速すぎて怖いけど鷹崎さんのサーブは早くないのかな？

と考えていると

鷹崎さんが

「やっぱ構えてる人がいると緊張感が違うねハルちゃん！タクマ。」

「そうだな。あれで打ち返してくれれば完璧なんだがな。つて真似するなよ！」

「ハルちゃんとタクマがハモつてる珍しい。

次行くよー！」

と言われた。

完璧に利用されてる

と思つていると春樹くんと鷹崎さんが近付いて来て春樹くんが

「打ち方教わったか？」

と聞いてきたので

「教わってないよ」と答えると鷹崎さんが

「グッと構えて

サッと引いて

スパーーンだよ。

わかつた？

リズムが大切だよ！」

と教えてくれるも曖昧で分からなかつたが春樹くんが
「なつちやんは感覚派だから説明が大雑把なんだよな。

いいか？エーちゃん。

打点・・・打つ所は腰の高さで左足よりちょっと前

これが基本でつて一度俺がタクマのサーブを打ち返すから・・・エーちゃんは今、携

帯持つてる？」

「待つて」

そう言つて俺はカバンに携帯を撮りに行くと

春樹くんが俺から携帯を取り何かを設定？している。

「今、カメラを設定したからスローモーションで取れる状態に。これで俺の打ち返す所

を撮影してろ。」

と伝えてコートに春樹くんは入った。そして

「タクマーフォア側に軽めの奴を1球と全力1球頼めるか？」

「任せろ。」

とタクマさんが返事をして

鷹崎さんが

「エーちゃん。もうハルちゃんを取り始めて。うーん。少し後ろからの方がいいな。」
と言つて鷹崎さんが俺を2人が見える位置に誘導。

「タクマー！ いいよー！」

と鷹崎さんが伝えると

タクマさんがボールを上に投げて軽く・・・じやなくて凄く速いのが飛んできた。
がそれを難なく春樹くんは打ち返す。

そして

「タクマー話が違うぞ。」

「すまん聞いてなかつた。」

「あの任せろはなんだつたんだよ。」

「気にするな。春樹なら打ち返せる。」

「当たり前なことを言うな。まあいいや。エーちゃん。今のが速いサーブに対する対処法。次が遅いのが来るはず」

そう言つて春樹くんはまた構えると鷹崎さんがまた、

「タクマー！ 今度は遅いのだからねー！」

と伝えるとさつきと同じようにまたボールを上に投げて今度は軽く打つてきた。

それをしつかりと打ち返してタクマさんの股下を玉が抜けて行く。

それを見て鷹崎さんが

「ハルちやんなりの仕返しかー」

と言うとタクマさんが

「おい！ 春樹。舐めた真似してんじやねえよ。」

とタクマさんが

それに対しても春樹くんは

「余りにもタクマが無防備だつたからな。ついつい狙つちまつたよ。」

と一触即発状態に

なつたかと思うとケロツとした顔で春樹くんはこつちに振り向いて

「エーちゃん。少しは参考になつたか？」

と聞いてきて

「ハルちゃんはフォアハンドストロークのフォームは綺麗だからね。まあ1球打ってみなよ。」

タクマは危険だからハルちゃんお願ひ。」

「任せろ。」

と言つてタクマさんの所へ行き

「タクマ。邪魔」

と言つてどかして

「エーちゃん行くぞー」

隣の言つて軽くサーブを打つてくれた。

春樹くんの打ち方は、と思い出しながら打つてみる。

すると綺麗に打ち返せた。

それを見て鷹崎さんと春樹くんが拍手してくれて

「今いい感じだよ!!」

と鷹崎さんが

「悪くねえな。初めてにしてわな。」

と春樹くんが言つてくれて2人が感動している俺に

「これがフォアハンドストロークだ。／だよ。」

と教えてくれた。途端にタクマさんがネットの所まで来て
「おい。

もういいだろ。

ココはAコートなんだよ。」

と言われて

コーチに何してるのと言われて

礼を言つて謝罪を言つて通路へ走つて言つたのだつた。

第10話

s i d e 春樹

「タクマ。そんな言い方しなくてもいいと思うぞ。」

「そうだよタクマ。言い方がキツすぎ。」

と俺となつちやんはタクマを攻めるも

「アイツの眼が気に食わなかつた。そんな事よりやるぞー。」

と誤魔化すようにタクマがまたサーブ練習を始める。

そして3日が経ち、俺がなつちやんと午前中に2人で練習をしてから、午後の練習が始まるまでの間にデートへ行つた。

いつものように公園の中を通つていると

「ハルちゃん。髪の毛に葉っぱがついてるよ。」

となつちやんが言つたので取つてもらおうと腰を曲げると

俺の唇になつちやんの唇が当たり

「嘘だよハルちゃん。」

と言つてきた所で俺とエーちゃんの視線があつてしまつた。

「なつちゃん。」

「どうしたのハルちゃん？」

「多分工一ちゃんに見られたよ」

と伝えると

「・・・・・ええええええええええ」

と俺が口を掌で抑えたから声は大きくならなかつたが叫んでいた。

とりあえず工一ちゃんはこのコートから出てしまつたボールを取りに来ているようだ。

コートに入りベンチに

影山・俺・なつちゃん

の順で座つて工一ちゃんの壁打ちを見ていた。

「まさか工一ちゃんが自主練をするとはな。」

と俺が言うと影山が

「以外だと思うか？」

と聞いてきた。

俺がそれに対して

別に

と応えようとするとなつちゃんが

「エーちゃんなら珍しくも何ともないよ。でも優等生だから休みの日も勉強してるので
と思ってた。」

「確かに。」

と俺となつちゃんが思つていると

「夜はやつてるみたいよ。」

と答えていた。

「さすが優等生だな。」

「だよな。」

それより春樹と鷹崎さんはエーちゃんが体験に行つたクラブでテニスずっとやつて
るの?」

と影山が聞いてくる。

「そうだね。5歳からずつとハルちゃんとやつてるよ。最初は家が近かつたからハル
ちゃんのお母さんに送り迎えして貰つたり、私のお母さんにして貰つたりね。」

「小五位からは2人で自転車かバスだな。」

影山もテニスやつてみたくないか?」

と俺が影山に聞く

それに対して

「確かにエーちゃんもやつてるし興味はある。」

と言つていたので「来てみろよ」と言おうとするとこのタイミングでなつちゃんがエーちゃんのカバンの上に載つていたと1冊のノートを取り出した。

「なにこれ？」

「影山・・・コレってまさか」

「春樹。そのまさかだよ。」

エーちゃんノートテニス版」

と聞いて俺となつちゃんはこのノートを開いて凝視した。

するとエーちゃんが取り返そうとやつてくるので

「影山。読みたいから時間稼ぎを頼むよ。」

「鷹崎さんの為に時間稼いでやるよ」

と言つてエーちゃんを抑えに入った。

ノートを読むと書かれている内容はオレとなつちゃんが教えた内容だつた。

「影山・・・ありがとう。それとエーちゃん。

このノートはキモイね。」

「それには私も賛成かな。」

「そもそもこれは基本で試合では動作が遅くなるから使えない技術ばかりだからな。でもエーちゃんはこのノートに書いてある事、全部やろうとしてるんだろ?」

「そうだよ。」

「確かにエーちゃん曰く今回の体験の時に完璧なショットが打てたらしいんだよね。まぐれで。」

「だからその時のフォームの正確かつ詳細なデータを知りたいんだ。」「でもだからって分度器まで持ってくるか?」

とエーちゃんは言つて影山が笑うと

「俺もその練習はやつてるぞ。イメージトレーニングの一種でプロもやる。」

「ハルちゃんの練習法を少し見せてあげたら。手伝うよ。」

となつちやんが言つてくれたのでカバンからラケットとボール・・・3脚にビデオカメラを取り出して俺は準備をしている。

s i d e 鷹崎奈津

「ハルちゃんのこの練習法は手本になるよ。凄く細かいからハルちゃんも。でもエーちゃん見たいに馬鹿みたいに細かくはやらないよ。ちゃんと必要な部分だけやつてるから効率が凄くいいんだよ。」

取り言つてるとハルちゃんが準備を終えたらしく

「なつちやん。よろしく。」

「任せて。」

そう伝えるとハルちゃんがサーブから打ち始めて一通り全てのショットを打つ。

それをベンチに戻つてハルちゃんと2人でハルちゃんのフォームをつて・・・

「ハルちゃん。もうスグ夕方の練習が始まるよ。」

「マジだやべ。とりあえずエーちゃん。壁打ちならSTCでも出来るからいつでも来いよ。俺となつちやんは毎日コートで練習してるから。」

「またね。エーちゃん影山君。」

そう言つて手を振るとハルちゃんが手を握つてクラブでまではランニング状態で向かう事になつたのだつた。

第11話

s i d e 丸尾栄一郎

2人を見送りながら手を振ると影山肩を組んできて
「うわつなんだよ影山っ」

「お前、鷹崎さん、好きだろ。」

と言われて取り乱したりして影山に笑われた。

でも俺が頑張って鷹崎さんに告白しても無理だよ。

だつて春樹くんには勝てないからね。

それに友達としては好きだけど恋人になりたいかと言われると違う気がするんだよね。

s i d e 春樹

翌日 日曜日

いつも通りなつちゃんを迎えて行つてSTCに向かうとエーちゃんが既に壁打ちを始めていた。

「早いなエーちゃん。」

「本当だね。たぶん、今日も完璧を求めてやつてるんだよ。」

「テニスの完璧ってなんだよ？」

「テニスの女王様に出てくる黒石さんのバイブルテニスじゃないの？」

「バイブルテニス。ねえ。」

俺はテニス以外を習つた事がないけどスポーツに完璧は存在しないと思うんだよね。」

「私もそう思うかな。でもエーちゃんにはエーちゃんのテニスがあるから好きな様にやらせてあげよう。私達にも私達なりのテニスがあるんだし。」

「まあそうだな。それにエーちゃんなら難波江よりもいつか強敵になりそうだし。」
と俺が言うとなっちゃんがきょとんとした表情になつて

「どうしてそう思うの？」

と聞いてきた。

「エーちゃんのテニスは今は未完成。というか多分今後どれだけ練習しても完成は無い。その証拠はあのノート。完成が無いから俺と難波江同様に全てのステータスを最大値に限りなく近くして弱点を無くそうとするはずだ。でも難波江とは何度も試合をしてわかつたことはまだ精神面が弱い事。対してエーちゃんは今の所の精神面は俺やうちやんよりも強いと言つていいと思う。」

「でもハルちゃんとそうちやんが揺らいだ所は見た事が無いよ？」

「それは未だに完全な敗北を知らないからだよ。俺もそうちやんもプロを除いて今の所はお互に敵はないからな。タクマが頑張ればわからないけど、最近のタクマは精神的にやられてんだよ。」

「でもエーちゃんが完全な敗北を知つたらどうなると思つてるの？」
と真面目な顔でなつちゃんは聞いてきた。

「経験の1つ。エーちゃんならそう捉えるよ。」「そつか。」

そして練習を終えてまたコートの横を通る時に
まだ壁打ちをしているであろう音が聞こえる。

「まさかまだエーちゃんは壁打ちをしているのか？」
「してたとしてもエーちゃんらしいよね。」

と話して横に来ると

エーちゃんはまだ壁打ちをしていた。
フォームも少しは安定してきていた。

俺はなつちゃんの手を取つてエーちゃんのいるコートに入りエーちゃんに声をかけ
る。

「エーちゃん。」

と声を掛けると気付いてこつちを見て
「どうしたの春樹君？」

と聞いてきた。

多分これを聞いたら驚くんだろうな。

「俺と軽い試合をやらなーいか?」

と聞いてみると予想以上の反応が帰つて來た。

「春樹くんとし・し・し・試合! 無理だよ。俺とやつても春樹君にいい事は何も無いよー」と慌てて答えてくる。

「俺の為の試合じゃない。エーちゃんの為の試合だ。」

と俺が答えるとなつちゃんが

「なるほど! エーちゃんに足りない経験を積んさせようとしてるわけだ!」

「そういう事。これでも日本でトップレベルだ。いい経験になるとと思うぜ。そのノートも内容が濃く出来るようにするからな。」

トップレベル俺がエーちゃんに伝えると。

「なら春樹君。よろしくお願ひします。」

「おうよ。」

こうしてエーちゃんにとつての初めてのテニスの試合をする事になつた。

第12話

s i d e 春樹

エーちゃんの初めてのテニスの試合は俺のサーブから始まる。
と言うよりもまだエーちゃんはサーブが打てないらしい。

エーちゃんはセンターにワイドとどちらにも対応出来る場所に意図してかしている。
いかはわからないが立っている。

「エーちゃん。」

「どうしたの春樹君？」

「この試合。俺はエーちゃんの経験になる為に全力でやるから少しでも多くの経験をつ
めよ。」

「うん！頑張るよ！」

とエーちゃんと話していると審判をしているなつちやんが

「ハルちゃん！エーちゃん！話してないで早く始めて！」

と言われてしまつた。

エーちゃんが始めて受ける試合のサーブは今後のどの試合よりもリターンが難しい

サーブに、したい。

選択肢は3つ。

ワイドを大きく使う

アンダーのカットサーブ

センターに1番速くリターンが追いつかない

フラットサーブ

スライスにのみ力を入れてバウンドした途端にほぼ真横に跳ねる

スライスサーブ改

俺が試合中の流れをサーブから変えたい時に使おうと思つているとサーブだ。

「行くぞーエーちゃん!」

俺はそう言つてセンターに全力のフラットサーブを打つ。

そのサーブはセンターに決まりエーちゃんも反応してリターンをしようと走り出す

「ハルちゃん! ナイスサーブ

・・・・・ 15-0

位置に戻つて今度はどうするか考える。

エーちゃんにとつての2本目。

あえてリターンをさせて軽いストローク戦にする。

そこから大きく流れを変えよう。

威力を落としてエーちゃんの打ち返せる所にサーブを打ち込む。
そこからはしばらくストローク戦が始まる。

10回目が帰ってきた所でドロツプショットを打つ。
エーちゃんは反応して打ち返してくる。

「チツ！」

しかも俺のいる所と対角線の所に
たまたまか！

いや。

アイツは俺のいる場所をしつかりと見ていた。

上手く打ち返せたのはまぐれだろうがまぐれだろうが入っている。

俺は全力で走りワンバウンドしたエーちゃんのリターンをロブで打ち返す。
エーちゃんがジャンプしても届かないギリギリの高さで。

エーちゃんはジャンプして

・・・いない！俺のロブの落下地点目掛けて一直線で走つて行く。

その時、俺の勘警報を鳴らした。

これで点を取られてはいけないと。

そして俺に向かつて強烈なストロークが帰つてくると。

ここからはエーちゃんの為に直感に任せせるのもありだな。

ここからのエーちゃんとの試合は圧倒。

試合を終えてスコアを見ると一度もポイントを許していない事がわかる。

この感覚。

そうちやんとの試合以来だ。

楽しかつた。

初心者のエーちゃんがもしかしたら前になつちゃんの言つていた。

「俺とそうちやんに勝てる相手」

になるのかもしれないな。

俺はそう思うと同時にこれからは一度も負けられないと思つた。

なつちゃんととの帰り道。

「ハルちゃん、エーちゃんとの試合、楽しそうだつたね。」

と俺に笑顔を向けて言つてきた。

「ああ。楽しかつた。まさか初心者相手に本気になるとは思わなかつた。けどアイツはいつか俺とそうちやんのいいライバルになるな。」

俺はそう確信してなっちゃんに

「俺は日本でやつていてよかつた。あの時そうちやんとアメリカに行かなくてな。ここでもプロの試合には出られる。」

と俺が言うと

「ハルちゃん！」

と俺に言つてくる。そして笑顔で

「ハルちゃんも頑張ろうね！エーちゃんに負けないくらい！」

「これ以上やれつて事だよな。」

「ハルちゃんにはハルちゃんのやり方があるでしょ？」

「そうだな。そうちやんにもエーちゃんにも負けないさ。これからもな。」

そう言つて俺はなっちゃんの手を掴み帰ろうとする。

が

「ハルちゃん。少し寄つて行きたい所があるんだ。」

と言つていたので着いて行くことにした。

着いたのは

服屋。

「ハルちゃん。今度の大会が終わつたら久しぶりにデートで一日使おうよ！」

と言つてきた。

「いいな。行こうか。一緒に優勝したらな！」

デートの約束とその時になつちやんが着る服と俺の服を2人で選んで帰つたのだつ
た。

第13話

s i d e 春樹

エーちゃんが入会して1ヶ月が経ちDコートまで上がってきた。

かなりキモイ顔をする頻度が上がってきたけどあの時の俺のサーブ予感は間違いな
さそうだ。

そんな時エーちゃんが俺とタクマのサーブを除いてタイムを測つてはノートに書いて
繰り返している。

するとタクマが

「なんだよ」

とエーちゃんにイライラしながら聞いている。

「えつ・・・あつ・・・」

と言葉に困っていると

「エーちゃん。一応俺とタクマはサーブ練を終えたんだけど? 何かようでもあるのか
?」

と聞くとエーちゃんの爆弾発言が飛び出た。

「やつぱりタクマ先輩もプロ目指してるんですか？」

と聞いていた。

タクマはエーちゃんの胸ぐらを掴んで今にも殴り掛かりそうになっていた。

「おい！タクマ。やめろ。」

と俺が言うとタクマが

「てめえは関係ねえだろ。すつこんでろ！」

「目の前で見せられて俺が止めねえとでと思つてんのか!?」

と俺とタクマが睨み合いながらもエーちゃんを、掴んだまま話さない。
そんな時三浦コーチが

「キ……キサマ！なにやつてんだ！」

聞いているのかタクマ!!」

とタクマを三浦コーチが説教してる時にエーちゃんが

「なんで……」

「なんでそんなに怒るんですか？」

と言われてタクマは頭を書いて腕を交差させて

「やつぱ今のはし。」

と言つていた。それを見て俺は

「ならタクマは出てけ！怒つたりなしつて言つたり鬱陶しいんだよ！」

と言うとタクマ

「わーたよ。出てきやいいんだろう！」

そう言つてコートを出ていった。

その後にエーちゃんは俺に

「春樹君。なんでタクマ先輩はあんなに怒つたの？」

と聞いてきた。それを聞いて俺も

「おい。お前もいい加減気付け。タクマの代わりに俺がサーブを打つてやる。どうせリターンの練習の為に見に来たんだろ。1箱分だけ打つてやるから終わつたらさっさと失せろ。」

と言うと

「ありがとう」

と言つたあとに

「何がいけなかつたのかな？」

と言ひながらコートに入る。そして

「春樹君。」

「なんだ？」

「もし俺がリターンを出来たらなんでタクマ先輩が怒ったのか教えてくれないかな?」と聞いてきた。

「ならお前が1つもコート内にリターン出来なかつたらこの事には今後一切首を突っ込むな。」

「わかった。」

こうして俺がエーちゃんのリターン練習に付き合う事になつた。

結果としてコート内にリターンが帰つてくることが遅れてやつて來たなつちゃんが一言アドバイスをしてエーちゃんなりに理解をしてからサーブに負けなくなつてきた。が最後まで帰つてくる事はなかつた。

最後の最後まで俺はフラットサーブしか打たなかつたけど多分スライスサーブを最初から打つていたらリターンに成功していたんだろうな。と思いながら練習を終えた。練習後三浦コーチが高校生の選手を集めて大会が近い事と俺となつちゃんが男女の第1シードである事とタクマが第2シードである事を伝えて解散となつた。
帰りはいつも通りなつちゃんと2人で手を繋いで帰つた。

「なつちゃんは今日は珍しく遅かつたね。」

「家の方で用事があつてね。遅れちゃつた。あははははは。」

それよりハルちゃん。第1シードおめでとう。」

「それはなつちゃんもだろ。」

「ならお互いにおめでとうだね。」

そして時間が経ち大会初日。

エーちゃんにとつての初公式戦が幕を上げた。

第14話

s i d e 丸尾栄一郎

大会が近くなつてから俺は諭吉君と話す事があつた。

初戦の大林良つていう人のコトを聞いたりシードの事を聞いたりグレードの事を聞いたりグレードの事を聞いたり

いたりと。

とりあえずハツキリとしたのはこのクラブで

男子の序列的に1位は春樹君で女子の序列1位は鷹崎さん。

男子の2位はタクマ先輩で女子の鷹崎さんから下と男子の僕以外のタクマ先輩よりも下は関東レベルのグレード2

自信が無いと思つている時に後ろから

ドーン

と背中を押されて驚いてボールをカゴから出しちやつた。

背中ドーンの犯人は鷹崎さんで後ろで春樹君が、頭を抱えている。そして春樹君は僕の考えを当ててしまう。そんな時2人が

「初めての公式戦が不安なのはしようがない。特に初戦はな。未だに俺となつちやんも

緊張するしな。」

「そうだよエーちゃん。私もハルちゃんも不安なんだよ。ハルちゃんじやないけど1回戦は何がなんでも負けられないしね。凄いプレッシャーがかかるんだよ。

いきなり調子が悪くなるし相手と相性が悪い事なんていくらでもあるから絶対に勝てるなんて保証は無いしね。

でも私にはハルちゃんが着いていてくれる。なんかねハルちゃんが試合の始まりだけでも見てくれるだけで

私は大丈夫！

そう思えるんだ。

私もエーちゃんの気持ちわかるからハルちゃんが空いてたら2人で応援行くね。

それとエーちゃんも私の試合を見に来てね。」

「まあ案内は任せろ。それと暇だつたら試合をする事に見に行つてやる。」

「私もエーちゃんの試合をハルちゃんの試合が終わり次第、見に行くからね。約束ね。」

そう言つて鷹崎さんと春樹君は立ち去つていった。

そして試合当日

神奈川ジュニアテニスサーキット

第1日目

俺の試合は早めに始まる事となつた。

春樹君の試合も早めに始まつたようだ。

春樹君の方のコートを除くと

「おいおい！なんで清水春樹がこんな大会に出てるんだよ！」

「あんなのに勝てるわけねえよ！」

と言う声と

鷹崎さん達同じクラブメンバーが

「ハルちゃん！頑張つてー！」

「春樹君！攻めてー！」

と女子達に声をかけられていた。

僕がアップに入ると鷹崎さんがこつちのコートに近づいてきた。

「エーちゃん。なかなかさまになつてるじやん。」

「試合だから一式そろえてみたんだけど

「似合う似合う。」

「鷹崎さんは春樹君の試合を見なくていいの？15分前に始まつたみたいだけど

「もうすぐ終るから大丈夫。こっちに来る時はストロークをしていたけど一言伝え
るとあと五分で行くって言つてもう不安は無さそうだつたしね。」
と鷹崎さんが教えてくれると春樹君がやつてきた。

「春樹君？ 試合は？」

「勝つたよ。・・・大林良か。がんばれよ。」

「うん。」

「それじゃあなつちゃん。受け付けに行つてくる。」

「わかつたー。カバン預かるね。」

と言つて春樹君は受け付けへ走つていつた。

s i d e 春樹

受け付ける報告を終えてエーちゃんの試合を見に行くと諭吉が

「博士ー！ 久しぶりです！」

「おう。諭吉か。その博士って言うのを辞めてくれないか？」

「ダメですか？ ・・・なら

教授出てどうですか？」

「博士にしてくれ。」

s i d e 大林良

初戦の相手は丸尾栄一郎。

S T C の選手だ。

周りにいる選手は凄いの一言に限る。

「男子学生テニス日本1位の清水春樹

第7シードの深沢諭吉

後ろにいる鷹崎ナツは女子の全国常連

その横にいる榎原真純と横山花も関東の常連

12歳以下第1シードの天才児田島勇樹までいる。

それに第2シードの江川逞

「良。あのメンツに囮まれてるんだ。丸尾栄一郎はただ者じやないかもよ。」

「確かに周りのメンバーが凄すぎる。」

「良。がんばれよ。」

こうして俺の大会が始まった。

第15話

結果から言おう。

エーちゃんの大敗ではあるが大きな収穫のある試合だつた。
いい点はリターン。

問題点はサーブ。

プレイスタイルはシコラー。

こりや明日、エーちゃんは筋肉痛だな。

と試合直後に考えているとコートから出てきた大林さんが話しかけてきた。

「清水君、だよね。」

と確認するように聞かれて

「そうですよ。」

「丸尾君。・・・彼の練習によく付き合うのかい？」

「原石なんでね。」

「そうか。俺はいつか清水春樹。君にリベンジする。そしてその時は勝たせてもらう。」「そういう寝言はタクマに勝つてからにしてください。それじゃあ失礼します。午後か

ら彼女・・・鷹崎ナツ除いて試合があるんで。」

俺はそう言つて大林さんから離れていた。

少し歩くとなつちゃんがお昼の軽食をベンチに座つて取つていた。

俺がなつちゃんの隣に座るとなつちゃんが

「ハルちゃん来ててくれたんだ！」

「この時間がなつちゃんが1番不安に感じる時間だからな。そんな時は俺の試合が終わつてれば隣に駆け付けるさ。」

と答えるとなつちゃんは笑顔で俺に

「ありがとう」

そう言つて軽食を再び取り始めた。

食べ終わると

「ハルちゃんはさつき大林さんと何を話していたの？」

「俺にリベンジをするんだとさ。」

「そつか。てもハルちゃんなら大丈夫！勝てるよ！」

そう言つてくれた後なつちゃんは昼ご飯を片付けて人目の使い場所へ2人で移動す

る。そして俺は先程のなつちゃんのセリフに答えるように

「当たり前だ。それよりなつちゃん。試合前のやつやるぞ。」

「うん。」

なつちゃんの声を合図に俺はなつちゃんの額に手を当て前髪を少し上にあげて額にキスをする。

少しして長いなつちゃんの額へのキスを終えるとなつちゃんは顔を真っ赤にさせるもどこかスッキリした顔をしていた。

「ありがとうハルちゃん。もう負ける気がしないよ！」

「ならよかつた。それと一言。」

「うん。」

「なつちゃんが例えこの試合中にどんなにアウエーになつたとしても俺だけはなつちゃんのホームだ。だからなつちゃんは自信を持つて試合に出ておいてよ。」

と言うとなつちゃんは

「いつも通りのセリフをありがとうハルちゃん。なんかねこれが無いと心細くなつちやうよ。」

となつちゃんが言つたので俺はなつちゃんの額を人差し指で小突く

するとなつちゃんは両手で額にを抑えて

「何する・・・」

ここで俺は唇にキスをする。

なつちゃんの不安が今日は強いそうだ。

多分工一ちゃんが来てなつちゃんが初めての公式戦のことを思い出したんだ。

「ハルちゃん。」

となつちゃんの少し弱い声。

「なつちゃん。なつちゃんは俺にとつてのなんだ。去年の俺が恥ずかしがりながら言つたセリフを思い出せ。」

そう言うとなつちゃんが

「愛してる。・・・ハルちゃんはそう言つてくれた。」

「俺は頑張るハルちゃんを愛してるんだ。」

負けて帰つてきたら抱き締めてやる。

勝つて帰つてきたら沢山褒めてやる。

さあもうすぐ試合だ。勝つたらこのままどこかに行こうか。どこに行きたい?」

「ハルちゃんの部屋。」

「そうか。俺の部屋か・・・?俺の部屋?」

「うん。」

「何が試合んだ?」

「勝てたらハルちゃん家に今晚止めて。」

「わかった。俺と親父と母さんを説得するからなつちゃんは外泊の許可を貰つてこいよ。」

と言ふと

「任せて！それじゃあ試合に勝つてくる！絶対に見ててね！」

そう言つてなつちゃんは走つて試合のコートに向かつた。
そして俺は歩いて向かうのだった。

第16話

なつちゃんの試合をするコートに着くと周りが

「あれがＳＴＣ鷹崎ナツか？」

「すっげー可愛い」

「しかも強いなんて。」

「噂では清水春樹と付き合ってるみたいだぜ。」

「清水春樹は男の敵。」

「あんなに可愛い鷹崎さんを独り占めするなんで許されない行為だぞ。
と周りが言つてる間に試合が始まるようだ。」

なつちゃんの気合が入った顔。

集中している顔。

試合中の顔が俺は好きだ。

s i d e 丸尾栄一郎

鷹崎さんの試合を見に来ると凄い注目されていた。

私でも不安になる。

鷹崎さんはそう言つていた。

でも試合を見ていると

この前まで不安そだつたのが嘘のように

無敵の鷹崎さんだつた。

鷹崎さんがコートを出ると真っ先に春樹君の元へ走つていつた。

凄い注目されていたのに鷹崎さんは春樹君がいれば大丈夫なんだな。

そう思えるのは凄いなと俺は思つた。

s i d e 春樹

なつちゃんが試合を圧勝して俺はなつちゃんと約束通り母さんを説得する。

「母さん。」

「どうしたのハル？」

「今日、なつちゃんが泊まりに来てもいいか？」

「いいけど向こうさんは大丈夫なの？」

「それはよかつたなつちゃんが今、説得中。」

「そう。泊まるのはいいけど変な事はしないでね。」

「わかつてるよ。なつちゃんの家へ行つてくる。」

俺はそう言つて俺はなつちゃんの家へ向かうのだつた。

なつちゃんの家に着いてから家のベルを鳴らすと二階の窓からなつちゃんが顔を出して

「開いてるから入つていきよー」

と言われたから家に入ると

なつちゃんの母親が立つていた。

「いらっしゃいハル君。」

「久しぶりです。えつとなつちゃんから話は聞いてますか?」

「ハルくんの家にお泊りでしよう。勿論いいに決まつてるわよ。未来の婿の家に泊まるんだもの。お父さんの説得は任せときなさい。」
と言われたのでホツとすると

「どうせならそのままなつちゃんを頂いてもいいのよ。」

とオバサンが言うとなつちゃんがちようど階段を降りてきていて
「ちよつとお母さん。何を言つてるの!」
「なんの事かしらねえ!」

と微笑ましい母娘喧嘩をしていた。

落ち着いてからなつちゃんのカバンを受け取り俺よ家へと向かう。
その間なつちゃんは俺の右腕にいつものように抱きついているのだ。
完成になつちゃんが定位位置になりつつあるな。

俺の家に着くと母さんが出迎えていた。

「お義母さん。久しぶりー。」

「そうねなつちゃん。久しぶりね。」

「今日と明日はお世話になります。」

「いいのよ。どうせならそのままハルを美味しく頂いてもいいのよ。」

と言われてなつちゃんは顔を真っ赤にしていた。

その後小声で

「ハルちゃんならいいかな。」

と言つていたのが聞こえてしまつたのはしようがないのかな。

第17話

なつちゃんが俺の部屋に泊まりに来た。

「ハルちゃんの部屋つて昔から余り変化が無いよね。」「どういう意味だ？」

と聞いた。

するとなつちゃんは

「なんて言うかさ・・・ゲームが好きなんだなって凄い思うよね。あとテニスの大会でのトロフィーも綺麗に並べて置いてあるし。」

と言われた。

その後しばらく静かに2人で肩を合わせているとなつちゃんが

「ハルちゃんのフォームのビデオとか無いの？」

「なんで？」

「ハルちゃんがどんな風に変化してきたのかなと思つたの。」

「俺の変化か。・・・あるけどなつちゃんのフォームも一緒に乗ってるから俺のと言うよりは俺となつちゃんのテニスの成長記録みたいになつてるよ。」

「見たい！」

となつちやんが言うので準備して
テレビで見ながらお互いのフォームの原点を見つめ直すいいキッカケになつたな
と思つてゐる。

ビデオを見終わると母さんが下から

「ハルくん！ナツちゃん！ご飯が出来たわよ！」

と聴こえたので

「なつちやん 行くか。」

「うん！」

2人で一緒に1階に降りるのだつた。

下に降りて食卓を見ると今日の試合、お互に勝つたから

「カツ」

確かに俺もなつちやんも好きだけども

この山のように盛られているカツはいつたい？

「お義母さん。この量は・・・多過ぎないですか？」

となつちやんが俺より前に聴いてくれた。

「母さん。さすがに多い気がするけど。」

と俺も言うと

「それがそうでも無いのよ。ハルくんは初戦の後は何時もの倍以上の量を食べるのよ。それにナツちゃんも聞いてるわよ。食べる量が増えていっているつてね。」

「「そうだったのか！／そうだったの！」

と俺となつちゃんは同時に驚いた。

そこは置いておいて結局夕食に出て来た山のようなカツは

俺が6・5

なつちゃんが3

母さんが0・5

で完食してしまった。

部屋に戻つて

「ねえハルちゃん。」

「どうしたんだ？」

「あんなに食べてハルちゃんは太らないの？」

「そうだな。抜いても全く減らないけど食つても増えないな。俺の適正体重から全く。」

「ブー！なんかそれずるい。私も余り変化しないけど増えるのに。」

「なつちゃんは少し増やしたほうがいいと思うよ。」

「私に太れって言つてるの？ ハルちゃんの為に体型に気を使つてるのに」

「それは嬉しいんだけどね・・・少しなつちゃんは細すぎるんだよ。」

「細すぎるの？」

「確かに俺の為に体型を維持してくれるのは嬉しいんだよ。でもね・・・それを考えても少し細すぎる気がするな。」

「そうかな？」

「まあ冗談だけどね」

「ハルちゃん！ 流石にこの話題で冗談は無いよ。」

と言つて俺の胸を両手でポカポカ可愛いパンチをしてくる
思いつきり抱きしめる。

「なつちゃん。」

「うん。」

「俺の為に何かしてやるのは嬉しいよ。でもね俺はなつちゃんの笑顔を何時までも見
ていたいんだ。なつちゃんの笑顔には何度も救われているからね。」

「うん。」

「俺の2度出たプロの試合。ランクの高くないプロ達の試合とは言え俺とそうちやんが

初めて出るプロの大会。初戦の時、俺は死ぬ程緊張していたんだ。そんな時に観客席を見るとなつちやんがいて俺にそのなつちやんの笑顔を見せてくれた。だからなつちゃん。何時までも俺の隣で同じ歩幅で進んでいいってほしい。」

と俺が言うと部屋のドアが開いて

「ハルくん。」

「なんだよ母さん。」

「今 のセリフはプロポーズ見たいね。」

私は将来、2人が結婚するのは賛成よ。ナツちゃんはいい娘だしね。ハルくんが笑顔で救われているのなら賛成する理由はあつても反対の理由は一切無いわ。」
と母さんに熱弁されて横でなつちやんが

「ありがとうお義母さん。」
と笑顔で答えていた。

母さんはそれを見て

「今から私もナツちゃんの家に行くわね。こんばんは2人で楽しんでねー」

そう言つて部屋の前でなつちやんの家にでんわを掛けて母さんが泊まれるようにして少しして家を出て行つた。

「なつちゃん。」

「なにかなハルちゃん?」

「なんか母さんが悪いな。」

「昔から変わらないね。」

「・・・二人きりになつたな。」

「うん。」

「ここから先は何がおきたのか控えておこう。

「こここのページに書けなくなつてしまふからな。

ちなみに翌朝の俺達は少し寝不足で少しおちやんが痛がつていた。
とだけ伝えておく。

第18話

s i d e 丸尾栄一郎

初めての試合から3日後

みんなの応援。

そしてベスト8の試合見学のためにトーナメント表を見ると

春樹君はさすが第一シード

タクマさんも勝ち進んでるし諭吉くんも勝ち進んでる。

鷹崎さんも春樹君と同じ第一シードなんだと改めて思うよ。

大林君も勝ってる。

鷹崎さんは今、他の女子選手たちと一緒にいる。

鷹崎さんは調子良さそうだな。

と思って男子のコートに向かって歩いていていると

「アニキー来てたんですね。」

「あつ諭吉くんボールを持つていてることは勝ったんだ！おめでとう」

「ま、一応第七シードですから。でも次からは手強いですね。そろそろ他のシード選手と当たりますし博士とタクマさん、第三シードの荒谷君にかんしていえばまだ1ゲームも落としていいないです。」

「なんだ。

「やつぱりすぐいいな。」

「と思つていると春樹君が誰かと一緒にやつて來た。」

「おっす！ 諭吉。」

「博士！」

「相変わらず諭吉くんは春樹さんのこと博士って呼んでるんですね。勝ちました？」

「おー宮川も。」

「そつちはなんとかね。」

「と諭吉君と話している宮川君？」

「ひょろ長いな。」

「こつちのブロックは進行早くてもうベスト4決めだよ。」

「次、大林君だから頑張らないと。」

「この人大林君とやるんだ。」

「と思つていると宮川君が

「あ・・・丸尾君でしょ？」

大林君と1回戦でやつた。」

「凄いシコリだつたね後で凄い噂になつてたよ。」「どんな噂だ!?」

「僕が敵を取つてくるから。」

「おう。頑張れよ宮川。」

「はい。春樹さん。」

「そうだエーちゃん。あいつは第4シード宮川卓也覚えておくといい。」

メモメモメモ

「あいつは中三だからな。」

それと2番コートの奥の老け顔。あいつは第2シードの荒谷パワーと速さを兼ね備えているカウンターのベースライナーだ。

あいつのプレースタイルは俺の直感型の時に近いものがある。

そうだろ諭吉。」

「そうですね博士。荒谷寛

はつきり言つて野獣ですよ。

種類で言うなら虎ですかね。

ちなみに博士は黒豹ですね。」

「なんだよ俺が黒豹つて。まあいいや。俺の試合がもうすぐだから行くぜ。宮川と大林さんの試合を見るのもいいけど俺の試合も見に来いよ。」

そう言つて春樹君は去つて行つた。

大林君と宮川君の試合は凄い迫力だった。

そんなふうに感じていると諭吉君が

「宮川も荒谷同様にベースライナーですが少しタイプが違います。

あのハードショットで7色のストロークと言われるほど多彩なボールを打ち分ける
んです。」

つて細かく教えてくれた。

試合を少し見ていると諭吉君がまた一言。

「さつき説明したのが神奈川の要注意プレイヤーですね。

僕と大林さんを入れといてくださいよ。

でもなんだかんだ言つても上位3人は少し格が違いますね。

荒谷はまだ上二人と離れていますが下とはレベルが違います。でまたタクマさんと
博士でもまたレベルが少し違うんですね。

まあこの大会の1番コートが注目ですよ。」

と諭吉君に言われて見に行くと春樹君は既にコートの外に来ていて。

「遅かつたな諭吉。」

「博士はもう終わつたんですか？」

「ああ。」

「相手は神奈川でも強い選手の筈ですが？」

「なつちやんがいるしプロの大会にも出でているし負ける訳にはいかないからな。タクマの試合でも見に行け。」

と言われてタクマさんの試合を見に行つてノートをとる。

すると後ろから

「勝つてみたいか？」

と言われて後ろを振り向くも

「え！ コーチ！」

「そういう顔をしていたよ。」

と言わされて

「ノートを見せてもらつてもいいかね。」

「え？ あつハイ！」

「・・・ただのメモですよ。面白くも何ともないと思ひますけど。」

と言うもコーチは黙々とノートを読み進める。

「楽しかったんです。

負けて

全然歯が立たなくて悔しかつたんですけど

眼がいいつて言われてそれが試合で実感出来て

そしたらもつと強くなれるかもつて

そうなればきつともつと面白いだろうって」

「キミは確かに眼がいい。

でもそれだけじゃない。」

と言つてくれて俺の事や、ノートのこと沢山コーチは褒めてくれた。そして最後に一
言。

「これから練習次第では春樹は厳しいかもしれん。もうプロの試合にも出でているがまだ学生である為メインがこつちになつているがな

他の神奈川のトップ選手を1年・・・半年・・・いや、もつと早く

キミは彼らより強くなれる!!

かもしねりない。

だがこれは冗談で言つているわけではない。ここからはキミ次第なんだ。

春樹が君の事を楽しみだと言っていた意味がやつとわかつたよ。
強くなりたいなら明日の朝7時にSTCの1番コートに来なさい。
コーチにそう言われてもちろん答えは決まっていた。
やつてやる！
そう思った。

第19話

s i d e 春樹

朝7時に1番コートに来るようコートに言われたから来たけど何の用だか。
と思っているとタクマとあつた。

「なんでテメエがいるんだよ。」

「それはこつちのセリフだよ。」

「呼ばれたんだよ。」

「俺もだよ。」

「ちつ行くぞ。」

「言われるまでもねえよ。」

と言いながら行くとコートに三浦コーチとエーちゃんがいた。

「朝から悪いね。二人とも結果はどうだった?・まずはタクマ。」

「準決勝で荒谷に

1—6

7—6

7—6

で勝ったよ。決勝はこいつに負けだ。」

「俺は宮川と準決勝で

6—0

で勝ちで決勝は

6—1

で勝ちました。」

「そうか。それで2人を呼んだ理由なんだが

「結果の報告じや無いのか?」

「もう一試合ずつして貰おうためだ。」

「誰と?」

「1人しかいないだろ。」

と言われて俺は

「さあーなつちゃんでも起こしに帰るか。」

タクマは

「帰る。」

と言つて帰ろうとすると三浦コーチが

「後悔しても知らんぞ。」

この試合はお前達のためでもあるんだ。」

と言つた後も少し言つていた。それを聞いているとタクマが隣で怒つていた。

「コーチ。俺はエーちゃんと割と練習をしているし帰つてもいいか?」

「春樹のデータのアップデートがもしかしたら丸尾君との試合で出来るかもしけん。やつてくれ。」

「分かりました。ただし全力でやるんでエーちゃんにポイントが入らないと思つていてください。」

「タクマならまだしも春樹とやつてみて点が入る所は想像つかん。」
と言つているとエーちゃんが横で頭を下げて

「お願ひします!」

と言つていた。

タクマは舌打ちしながらも

「しゃーねーな、やつてみつか。」

と言つて2人のウォーミングアップと試合が始まった。

<。

俺はコーチに言つてランニングも兼ねてなつちゃんの家へ走つて行つて起こしに行

「ハルちゃん。おはよう。」

「もう出れるか?」

「うん。なんだつて三浦コーチの用は。」

「俺とタクマがエーちゃんと試合をする事。」

「と言うと驚いた顔をするなつちゃん。」

「それより速く行くぞ。タクマの次は俺なんだ。」

「わかつたから待つてよ。ハルちゃん!」

とこうして俺はなつちゃんを連れてコートに戻つてくると

エーちゃんノートをタクマが持つてエーちゃんと話している。

タクマが帰つてたからエーちゃんに話を聞くと

タクマとの距離が今のところ分からぬから自分の使える時間を限界まで使ってそれからどうか検討すると伝えたらしい。

エーちゃんらしいが

「タクマとの距離がわからないなら俺との距離はもつとわからないぞ。」

そう言うと

「ハルちゃん。確かにハルちゃんはタクマより強いけど強いのタイプが違うからね。もしかしたらエーちゃんにとつてはハルちゃんの方が測りやすいかもしないよ。」と言つてくる。

その後にエーちゃんが

「タクマさんと春樹君のタイプが違うってどういう事?」

と聞いてきた。それに対しての答えを言つたのが三浦コーチで

「タクマがサーブ＆ボレーヤーで春樹は万能型オールラウンダー。簡単に言うとこんな所だが細かく言うとそこだけじゃない。簡単に言うと春樹のプレースタイルは多重人格だな。」

と言われてエーちゃんは頭がこんがらがつっていた。

「仕方が無い、春樹。全部のプレースタイルを丸尾に見せてやれ。」

「マジですか?」

「マジだ。」

「カウンタータイプは頭が特に疲れるんですが。」

「わかっている。」

「直感型はスタミナ消費が凄いんですが。」

「それでも以前の爽児との2時間以上の長期戦を戦い抜いたなら問題無い。」

「はあ一分かりました。という訳でエーちゃん。何時もよりもギアを上げて最短最速で試合を終わらせるから粘れよ。」

と言つて1セットの試合が始まつたが
15分で終わつてしまつた。

第20話

s i d e なつちゃん

少し前のハルちゃんとタクマとの試合以降エーちゃんは私たちAコートに混じつて練習に参加していた。

それも毎日。

八月下旬にハルちゃんととのデートも兼ねてエーちゃんが出ているグレード4の試合を見に来たら少しうるさくなつたけど気にしない。

まあエーちゃんはギリギリながら初勝利。

嬉しそうだつた。

夏休みがおわり二学期に入るとタクマがエーちゃんのクラスでハルちゃんとエーちゃんの3人で話している。なんだろう?

s i d e 春樹

「お！いたいた。」

「あれどうしたんだ？タクマ。」

「コーチが丸尾を今日の合同練習に誘えつてよ。」

「そうか。そりや良かつたな！・・・」

とエーちゃんに言つたつもりなのだがまだプリントを集めていた。

仕方が無いか。

「タクマ。少し待つていてくれ。」

そう言つて俺は佐々木さんの所は行き

「悪い佐々木さん。あのヤンキーがエーちゃんに用があるみたいでさ。少し1人でプリントを集めて貰つてもいい？」

「いいけど・・・ヤンキー？」

「ああ。俺とエーちゃんが通つてるテニスクラブの先輩だよ。すまんエーちゃんの用が終わつたら直ぐに労働させるから。」

俺はそう言つてエーちゃんを連れてタクマの元へ行つた。

「コーチから伝言だ。

今日、STCに宮川と荒谷が来るらしい。「もし一緒にやりたければ早めに来い」だと。以上コーチからだ。」

そう言つてタクマは去つて行つた。

「とにかく伝えたぞ。」

「ありがとうございます。」

よしこれでエーちゃんをまた労働させられる
そう思つたら

「春樹君は出るの？」

「当たり前だろ。久しぶりに全力を出せるんだ。楽しみだぜ」と少し笑つていると

「春樹君。悪者の顔になつてるよ。」

「そんな事より速く佐々木さんを手伝え。」

伝えて佐々木さんの所へ行くと

「清水君。」

「春樹でいいよ。」

「なら春樹君。」

「なんだ？」

「丸尾君変わつた？」

「そうだな。夏休み中は俺とタクマに試合でボコボコにされまくつたな。」

「ボコボコに・・・そなんだ。」

「春樹君はテニスどの位上手なの？」

と聞かれて前に答えた気もするけどと思ひながら

「たまにプロの試合に出て2回優勝する位かな。」

「プロ選手なの！」

「まだ学生だから学生テニスに出ているだけ。世界ランキングにも乗ってるよ。今は確か。」

そう言つて携帯で調べると

250位

と出ていた。

「世界ランキング250位だな。」

と言ふと佐々木さんは

「は、春樹君つて凄いんだね。」

「ずっとテニス1色の生活だったからな。中学の頃は割とテニスの為に学校を休んでたしな。」

「そうなんだ。」

「まあ今度の大会が近くなつたら声を掛けるからエーちゃんの試合を見に行つてあげたら。」

「そうしてみる。」

と答えてきたので耳元で小さな声で。

「佐々木さんつてエーちゃんの事、好きでしょ。頑張れよ。応援してるから。」

「ありがとう。」と言っていた。

と伝えると顔を赤くして

第21話

s i d e 春樹

放課後

2年になり俺となつちゃんにエーちゃんは同じクラスになつた。

「エーちゃん。なんでエーちゃんはいつまでもなつちゃんの事を鷹崎さんって呼ぶんだ?
? 大分可愛そうだぞなつちゃんが。」

と俺がエーちゃんに言うとなつちゃんも

「そうだよエーちゃん。去年から同じクラブの仲間だし今年からは同じクラスなんだも
ん。なつちゃんかナツって呼んでよ」

「でも春樹君と付き合つてるし大丈夫かな?」

とエーちゃんが俺を見ながら言つてくる。

少し呆れながら俺は

「大丈夫だ。エーちゃんがなつちゃんつて呼んだくらいで俺となつちゃんの関係は変わ
らないからな。」

と俺も答える。

それに便乗する形でなつちゃんも

「そうだよエーちゃん。もつとフレンドリーにいこうよ。」
と言っている。

それを聞いてエーちゃんは周りの目を気にしながら
「それじやあ・・・な・・・なつちゃん。

なんか凄い恥ずかしい。」

とエーちゃんは顔を紅くしながら言う。

「そんなに恥ずかしがりながら言われるとムズムズするよ。」
確かに。

「エーちゃん。俺の事もハルでいいぞ。」

と言うとエーちゃんは心底驚いた声で

「えつ！なんて？」

と聞かれてしまった。

そんなにおかしな事を言つただろうか？

と思つていると爽児からメールが来た。

内容は

今年の日本での大会の前に

ハルと1度、全力で試合をしたい。

ハルが出ることは知つてゐるけど

1試合だけ頼む。

とメールが来た。

爽児とは当たれば2回戦。

三浦コーチに相談だな。

と思つてゐるとなつちゃんが俺の携帯を覗いていた。

「ハルちゃんはそうちちゃんと試合するの？」

となつちゃんは聞いてきた。

「俺はやりたいと思つてゐる。でも本当は大会後が1番なんだよな。」

と答えるとなつちゃんは笑顔で

「きつと大会で当たるよ。お互に1回勝てば当たるんでしょ？ いけるよ。」

と言つてくれた。

「そうだな。・・・エーちゃんを連れて俺とそうちちゃんの試合を出来るだけ全部見せてく

れなか？」

と俺がなつちゃんに伝えると

「いいの？ エーちゃんはいつかライバルになるかもしねないんでしょ？」

と言つてくるので俺はそれに笑顔で答える。

「エーちゃんの今の練習のペースでは脅威にならないから発破を掛けたらなと思つてな。」

と伝える。

するとエーちゃんは
「春樹君に質問なんだけどなんで俺なの？」
と聞いてくる。

それにはどう答えようか迷うが

「エーちゃんの反復練習は地味だけど確実に意味のある練習なんだ。それを何時間も続けられるのはある種の才能だ。エーちゃん自体にテニスの・・・というかスポーツの才能が高いかと言われると謎だけどテニスにおいてはエーちゃんの反復練習は才能が自分より上の相手を倒す事が出来るかもしれないし確実に身に付けることでもしかしたら才能が開花するかもしれない。だから俺も基本の練習には他の応用以上に時間を掛けるし・・・違う。かけないといけないんだよ。」

と俺は真剣に答える。

そして最後に一言。

「俺はエーちゃんノートが凄い脅威に感じるよ。どこまで知られているのか・・・どんな

対策をしているのかがまるで読めないからな。」

俺はそう言ってなつちゃんを連れてＳＴＣに向かい始めるのだった。

第22話

s i d e 春樹

アップが終わってから荒谷と宮川に声を掛ける。

「寛。宮川。ダブルスで試合をしてくれねえか。」

と言ふと荒谷が

「ダブルスか。いいな。やろうぜ。まずはダブルスでお前に勝つてやるよ。」

と言われて宮川は

「俺からもお願ひします。」

と言つて了承を得た。

コートに入ると荒谷が

「おい！春樹！」

「どうしたんだ寛？」

「なんでお前のペアが鷹崎なんだ。STC最強ペアを見せるつて言つてたろ。」

「最強だろ。二人とも前回の大会は第1シードだ。」

「わかつたよ。でも手は抜かねえぞ。」

そう寛が言つて試合を始めるも俺の守りを抜けずなっちゃんの女子ならではの攻めを止めきれず

俺となっちゃんの勝ちになつた。

「あー！負けた。確かに最強ペアだな。」

「だろ。」

「はい。鷹崎の攻めは男子の方ではやらない攻めでしたし凄いですね。」

「そりやあ私は荒谷君に比べたら体力も筋力も無いからね。女子の柔らかいテニスで勝つよ。それに失敗してもハルちゃんがカバーしてくれるしね。」

「当たり前だろ。」

といつの間にか2人の空気になつていて荒谷が

「惚気けすぎだ。砂糖を吐きそうだぜ。」

と言つて宮川は

「お幸せに、あははは」

と

こうして俺たちの今年は色々あつて大会は終わりトレーニングの冬に入つていつた。

s i d e 丸尾栄一郎

冬に入ると大会は無くなりトレーニングがメインになつた。

春樹君は何時も誰よりも早く来てトレーニングを鷹崎さんと始めている。

内容も凄く濃いと言う事をコーチに聞いた。

がお正月を中心に2週間

春樹君と鷹崎がいない時期があった。なんでもアメリカに短期留学しているようだ。その後、短期留学から帰つてると春樹君と鷹崎さんはお土産と一緒に凄いレベルアップした姿をコートに見せていた。

コーチが春樹君に本格的にプロとして活動しないかと言つているが学生の内は学生の大会にだけ。夏休み中は海外も出るけど基本は学生の大会に出て今年の日本の大会には出場すると言つていた。

それにもうそちやんつて誰なんだろう。

鷹崎さんに聞いてみると

一昨年からアメリカでプロを目指して去年からプロとして活動している春樹君のライバル。

ランキングも春樹君と大差ないみたい。

短期留学の時に2回試合をしてまだ負けなかつたけどすごい迫力のある試合だつたらしい。

そんなプロの大会に今年は出ると春樹君は宣言したんだ。

凄いな。

純粹にそう思つた。

s i d e 春樹

2月に入りメニユーを少しずつ試合仕様に変えていった。

春から大会が始まる。

もうすぐプロの大会も始まるからそれに向けて調整もしないといけない。やらないとな。学生テニスの調整とプロの大会への調整はわけが違う。
気合を入れないと。

s i d e なつちゃん

今年のハルちゃんは今までとは比べ物にならないくらい気合が入つてゐるな。
コーチにはプロの大会に出ることを宣言してゐるし凄いな。

私も負けてられない。

そう思つて私もハルちゃんのトレーニングに少し参加すると
すぐに追いつけなくなつた。

そうちやんもハルちゃんも私を凄い置いていつちやつたな。そう思えて仕方ないの
だつた。

第23話

s i d e 丸尾栄一郎

テニスを始めて2度目の夏。

飛躍の刻

s i d e 春樹

今日は大会の都合でなつちゃんの試合は無い。
が周りからの注目はすごい。

「ハルちゃん。エーちゃんはどこにいるんだろう？」

「たぶん壁打ちでもしてるんだろ。」

そう言つて俺はなつちゃんの手を掴んでエーちゃんの使いそうな壁打ち出来る所へ
行く。

それにしてもなつちゃんの試合を見る事ができないの大会は初めてだな。
と思っているとコートの近くから

「すげえ安定感だな。」

「ネット上30cmの1点をまったく同じリズムで
それもさつきからず一つとミスんねえ。」

と言つていたので覗いてみるとエーちゃんがやんだつた。

「壁打ちだけなら俺も勝てねえな。」

と冗談で言うとなつちやんが

「ホントに壁打ちの大会があれば優勝だね。」

と笑顔で返してくる。

「なつちやん。確かにそこの奴らがず一つとつて言つてたよな。それはヤバくないか
？」

「そうだ！止めないと！」

そう言つて俺となつちやんはコートに入りエーちゃんを止める。

「おはよう春樹君になつちやん。」

「息を切らしながら言うので俺はエーちゃんにチヨップを入れて
「試合前に疲れてどうする。」

と言ふと

「でも何かやつてないとキンチョーして」と言うので少し呆れる。

するとなつちやんが

「壁打ちは完璧なんだから自信持ちなよ。」

と言つので俺も

「どうせまだそこまでたくさんの方の技を習得した訳じやないんだ。結果は着いてくる。」

と言つもエーちゃんが

「そういわれてもな」

と聞くのが面倒になるので流してるとなつちゃんが「少しくらい緊張するのは当たり前だよ。

工一ちゃん

この大会を目指してずーっと頑張ってきたんだから、
と言ふよりは、ハレやんが岡太へなりすぎ。

と詰つてゐるにハリセシハが因ノくないでモ

「そうかもしれないけどー」

と言つて俺に。ボカボカしてくる。

今日のエーちゃんの試合。

佐々木さんに伝えたけど来れるか?

出来ることをやりやあ

と思いながら俺も受け付けに回る。

「アニキー博士！・おはようございます。」

「おう。諭吉おはよう。」

「博士は相変わらずなつちゃんと一緒なんですね。」

「まあな。」

「博士。女の子を紹介してくださいよ。」

「なら、緒方に転ばれる覚悟で緒方の彼女を紹介しようか？」

「緒方つていうと博士の師匠以外のもう1人のライバル！」

「まあそうだな。来年には復帰するらしい。」

「緒方さんが来年に復帰ですか。て確かに腰に病を。」

「リハビリを終えてトレーニングしてるよ。」

「そうですか。良かつたですね。」

と諭吉と話していると後ろから宮川がやつて来て

「お久しぶりです

丸尾君。春樹さん。」

と言われて丸尾が
「宮川君久しぶり。」

「久しぶりだな宮川。」

と言ふと諭吉が

「アニキー今回も出揃いましたね。」

第1シードの清水春樹

第2シードの江川逞

第3シードの荒谷寛

第4シードの岩佐博水

第5シード大林良

第6シード宮川卓也

そして僕を含めて神奈川7天王が今年も集まつたわけですよ。」

と諭吉が言つたから俺は頭にチョップを入れて

「それを言うなら四天王だ。」

と言ふと

「博士。そんな事したら僕が入らないじゃん。」

と言つてきた。

そんな時に荒谷がやつて來た。

第24話

s i d e 春樹

荒谷が

「よーっ

みなさんお揃いで」

「久しぶりってほどでもないな。寛。」

「そうだな春樹。今年こそは第1シードのお前を倒して俺が神奈川n o. 1になつてやる。」

「それと言うならまずは決勝に上がつて来い。そういうや今年は準決勝で俺とタクマがやるから寛は決勝に上がるチャンスだな。」

「それは俺が春樹に負ける前提で話してるので？」

「俺に最近勝つたかよ。」

「練習と本番はちげえよ。」

「違うとしても練習で勝てない相手に本番で勝てるとでも。まあいいや。寛。決勝で待

つ。」

俺はそう言つてなつちやんがもとへ行く。

s i d e 佐々木

なんか私は凄い場面を見ちやつた？

春樹君と他2人が凄い睨み合つていて、最後は春樹君が

「決勝で待つ。」

そう言つて出て行つちやつた。

と思つてると鷹崎さんに話しかけられた。

「佐々木さん。」

「鷹崎さん。春樹君はいいの？」

と聞いちゃつた。それに鷹崎さんも答えてくれた。

「今年から試合前にやる事にした儀式があるんだよ。プロの大会も近いから。」

「それを見てみてもいいですか？」

「いいけど邪魔をしちゃダメだよ。」

「あれはね別にこういう所でやる必要は無いんだつて。静かな場所でやりたいみたいだ
た。」

「あれはね別にこういう所でやる必要は無いんだつて。静かな場所でやりたいみたいだ
い」

けど。」

「うん。近付ける雰囲気じゃないね。」

と言うも冗談じやなくて間違えて近付いたら死ぬんじやないかつてくらい凄い迫力を持つてる。だから鷹崎さんも隣のベンチに座つている。

そんな時春樹君が私に向かつて

「佐々木さん。エーちゃんの試合を見に行かなくてもいいのか？隣のベンチになつちゃんと座つているのは足音でわかる。」

と言われた。なんで足音でわかるの？ そう思いながらも私は丸尾君の試合の応援に向かうのだった。

s i d e なつちゃん

ハルちゃんが私を自分の隣に呼んだので隣に座つた。

まだ座禅を組んだままだけど少し緊張が解けるのを感じた。

今は第1段階の緊張をあえて高めるという工程を終えて第2段階の緊張を無くす段階に移つたみたいだ。

足を崩し始めて目を開けて私を見つめるなりいきなり

「やつぱりなつちゃんは綺麗だよね。」

「・・・どうしたのハルちゃん！ いきなり。」

いきなり綺麗だと言われば誰でも慌てるはず。私は悪くないもん。
と思っているとハルちゃんが

「やっぱりなつちやんがいるだけで負ける気がしない。」

と言っている。

そして私にはその背中に金色のオーラの様なものが見えたのだつた。
つて違う！

簡単に言うと熱量は十分なのに気持ちはいつも以上に落ち着いてる。
以前にハルちゃんから聞いた

「ゾーン」

の時も私は同じ雰囲気をハルちゃんから感じた。

私も何度かゾーンと思われる状態には覚えがある。

まさかハルちゃんのこの儀式つてゾーンに近い状態を作り上げる為のもの？
と考えていると

「なつちやん。ヘアゴムを一つ貸して。」

と言われたのでカバンから1つ取り出してハルちゃんに渡す。
するとハルちゃんは後ろ髪を縛りちょっとしたポニー テールみたいになつた。

第25話

s i d e なつちゃん

ハルちゃんのゾーンに近い状態を作り出すと思われる儀式。

この大会中は常にゾーンに近い状態を維持していた。

そして今回の大会は異例な準決勝で第1シード対第2シードの試合がある。この試合もあの儀式を行つてから入り相変わらずゾーンに近い状態を作り出している。

ちなみにエーちゃんは荒谷君との準決勝で負けた。

でもいい試合だつた。

それよりも今はハルちゃんの試合。

集中しているしハルちゃんＶＳ気合十分のタクマ
たぶん二人共最高の状態で試合に挑んでいる。

三浦コーチも

「今日の試合は凄いことになりそうだな。」
と言つていた。というか横で見てる。

「ナツ。ハルはゾーンに入っているのか？」

と聞かれて

「ハルちゃんは入り方は知つてゐるそうでしたけど自分の意思では入りきれないってのもあるし言つてました。本人曰くゾーンは大きな扉をこじ開けて深い深い水の中に沈んでいくイメージだそうです。」

「そうか。扉を開けて水の中に沈んでいくイメージか。」

「はい。」

と話しているとハルちゃんがサーブを打とうとしていた。

ハルちゃんはセンターに立ちタクマのコートのセンターに最短距離で最速のサーブを打ち込んでいた。

「凄い。タクマが追いつけないなんて。」

「最短距離を最速のフラットサーブか。すごい武器だな。フラットサーブの速さが相手に反応出来る速さならチャンスボールだがエースを取れれば1球で格付けを出来る。」
と三浦コーチが言つてゐる間にハルちゃんが2球目のサーブを最長距離でタクマからエースを奪つた。

それを見て三浦コーチが

「ハルはタクマの心を折に來てゐるのかもしがん。今のはどうやつてかわからんがバウ

ンドからして野球と同等レベルのバックスピンを掛けて無理さり得点したんだろう。」「バックスピンのサーブって普通ならホームランですよね?」

「あの長身とジャンプ力を活かしてより高い所からサーブを打つ事で強引に点を取つてるんだ。バックスピンなら終始のスピードの差が小さい筈だ。」

「ハルちゃんはホントに凄いな。」

「ああ。なんでもまだ学生テニスをしているのかが不思議な位にな。」

と三浦コーチも言つている。

「たぶんハルちゃんはタクマに本気になつてもらいたいんだよ。そうちちゃんとハルちゃんとの才能の差に嘆いていた時のタクマを見ていたハルちゃんは少し辛そうだったから。」

と私が言うも三浦コーチの意見は違つた。

「あの3人でタクマが一番勝てないのは練習の差だ。」

とコーチがいう。

「そうだ。この3人の才能は同レベル。だがハルは日々の練習の内容を濃くしているがタクマの練習内容はハルのように濃く無い。その差が試合をするとハッキリ出てくるんだ。爽児の練習内容もハルと同じ位濃いものだつたからな。」

第26話

s i d e なつちゃん

ハルちゃんの3度目のサーブは切れ味鋭いツイストサーブ。

でもタクマはこのツイストサーブを読んでいたのかこれをライジングで打ち返す。がハルちゃんは既に前に出て来ていてドロップショットの構えに入っている。

その構えに反応してタクマが前進して来たのをハルちゃんは確認してドロップショットの構えのままロブを上げた。

でもタクマはそのロブに対してスマッシュを打つ。

そしてなんとハルちゃんはそのスマッシュに背を向けたのだ。

あの構えは

と私が思うと同時にタクマは舌打ちをする。

そう。スマッシュに背を向けて打てるハルちゃんの技は1つある。

ヒグマ落とし

ハルちゃんの使うカウンター技の1つでその打球はコートの最後尾にあるライン上に落ちる。

スマッシュ直後の体制の崩れているタクマには追いつけるはずもなくそのままハルちゃんの点となる。

40—0

ここまでハルちゃんの一方的な勝ちゲーム。

と思つていたけどここからの撃ち合いはどんどん激しくなつていく。

しばらくして試合は2セット目に入り

5—0

でハルちゃん勝っている。

ハルちゃんはゲームは取られていながらポイントは割と取られている。

普通に考えればこれが最終ゲーム。

このまま決着が着くようと思えるが
私の予想が外れた。

なんとタクマがこの試合中でもしかしたら1番速いサーブでハルちゃんからエースを奪つた。

この試合中にタクマはハルちゃんから1度もエースを奪えていなかつたけどここに来てのエースはたぶんタクマの中で何かが吹つ切れたんだと思う。

タクマはエースを奪つた次のサーブをワイドにスライスサーブで攻めた。

それにハルちゃんは難なく追い付いてクロスでリターンをする。タクマは少し逆をつかれたようで追いかける。

追い付くも力の無い打球を返す事になる。

でもそれがタクマにとつて良かつたみたいだ。

ネットに掠つてハルちゃんのコートに落ちている。

ネットに当たる事を予測なんてしようがない。

ここで連続得点を取つたタクマは3度目も強烈なサーブをハルちゃんに打つ。

3度目のサーブはハルちゃんが難なく打ち返したように思えたがさつきのタクマと同じようにネットに掠つて勢いが死んでタクマがネットにそのまま落ちた。

「三浦コーチ。今のはハルちゃんは狙つたんですか？」

と私が聞くとコーチは

「ハルはネットに当てて相手のコートに入れる練習を普段からしている。試合では初めて見るが、さつきの仕返し・・・もあるのかもしれない。」

と三浦コーチは答えてくれた。

ネットに当てて相手のコートに入れる。

私も練習中にたまに起ころる事はあるけど狙つたことは無い。

ハルちゃんはそれを狙つて出来るようにしていると考えるとやつぱりハルちゃんは凄いんだなと改めて思う。

少ししてこのゲームで

40—30

となりハルちゃんがタクマを追い抜いた。

たぶんこれで最後になる。そう思つてみるとタクマがまた・・・さつきよりも更に速いサーブを打つていた。

でもこれにハルちゃんは追いついている。

と思つていると三浦コーチが横で

「ハルはゾーンに入つたかもしぬない。」

と言つている。

ゾーンは圧倒的な集中状態でハルちゃんが普段から自由に入れるようにしようとしている状態の事。

このタイミングで入るなんてハルちゃんらしいな。

そう思つてゐる間にハルちゃんはツバメ返しで試合の勝ちを決めていた。

第27話

s i d e 春樹

試合終了してなつちゃんというか受け付けで報告を終えるとエーちゃんがやつて来て。

「春樹君に質問があるんだ。」

と俺の目を見て言つてきた。

「答えられるものなら答えるよ。」

と言ふと何かを決心してエーちゃんは聞いてくる。

「俺がテニスを始める時に春樹君達のテニスを趣味だと言つた。今思うと凄い馬鹿なことを聞いたと思う。だけど・・・だからこそとさもう一度聴きたい。」

春樹君のそのプロとしてやつていこうという気はどこから来るの？」
と聞いてきた。

それを聞いて俺はエーちゃんは根本的に馬鹿でアルト思つた。

多分、この気持ちは俺が説明した所でエーちゃんには理解出来無い。
だからこそ一言。

「今度の日本でやるプロの大会に俺が出ることは2年になつてすぐに言つたから知つてるな。」

と言ふとエーちゃんはうなずいて

「うん。」

と答える。

「その試合を見てからでとこれから練習内容は中からでも答えは時分で見つけるしかないと思うぜ。俺となつちゃん。プロを目指すという目標は同じでも理由は少し違うからな。」

と俺はエーちゃんに伝えた。

プロを目指す理由は人それぞれ。

同じ様な理由でてるを目指す者はいてもその中身まで同じとは限らない。
と考えて去ろうとするエーちゃんが

「もう1ついいかな？」
と聞いてきた。

「なんだ？」

「岩佐君の技術のやり方はわかる？」

と言ふて何を言つているのかわからなかつた。

俺からするとそこまで「ごい」と思わせる気迫が無いから終始負けるかもという感じ
はない。なぜそんな選手のことを？

「技術って何を言つてるんだ？」

と聞くとエーちゃんが

「ほらえーと・・・速い球を遅く返したり遅い球を早く返したり。」

と言われた。

はつきり思うと何を言つてるんだ？

と思つた。

「あんなの技術じゃなくて基本だろ？」

「基本？」

「練習を思い出してみろ。」

「練習・・・・・分からぬいけど。」

と言われておかしくなつた。

「俺は簡単に言うとキャッチボールだよ。」

「それはテニスの練習じゃなよね？」

「だつてエーちゃんが練習でわからないんだぜ。どう答えるよ。

一応感覚的にはラケットでキャッチボールだ。」

「ラケットでキャッチボール……？」

「多分岩佐さん、どれのことを言つているのかわかつたから答えるとあれは未完成だ。眞に力を發揮するのは同じフォームで全ての球種を打ち分けられるようになつたらあれの完成だ。出来てないなら未完成。」

「同じフォームで全ての球種を打ち分けられるようになつたらあれの完成。」「そうだ。同じフォームで全てだ。」

「春樹君は出来るの？」

「出来るから言つてる。テニスつてのは身体能力で勿論だし頭脳も勿論だけど「後の先」を取り続けてジャンケンの「後出し」をし続ければ負けないんだよ。」

と俺が言うとエーちゃんはノートを取り出して何かを書き出した。そしてら
「後の先つて何！」

と聞いてきた。

「後の先つてのは要するに相手の動きを理解して変更出来ないところでこつちが変える感じだな。でも実際には無理だからジャンケンの後出しだな。」

と言うとエーちゃんはノートに書いていて

「ありがとう！」

そう言つてどこかへ行くのだつた。

第28話

s i d e 春樹

俺が本格的に準備を終えて帰ろうとすると寛がやつてきたからなつちゃんに少し待つてもらつて2人で少し離れた場所へ行く。

「春樹。まずは決勝まで来たんだ今度こそは勝たせてもらうぜ。」
と威嚇する様に言つてくる。

「いいね。タクマとの試合も楽しいけど寛との試合はそれはそれで楽しいんだよな。」
と答えるとお互に少し笑つて寛が

「女子の方は今大会人数が少ないから決勝終わつたんだろう?」
「そうだな。なつちゃんは優勝したよ。」

「そうか。」

「だから毎度で悪いが今大会も優勝を譲る訳にはいかないんだ。」

と俺が言うと寛は

「そうか。でもな俺もいつまでも春樹とタクマさんの下の神奈川の3番手なんて地位にいるつもりは無い。春樹がプロで出でていようが関係無い。そのプロを倒して俺も堂々

とプロになる。それだけだ。」

と言われて俺は確信した。

寛はエーちゃんとの試合に門を1つこじ開けた。

恐らくは俺の開いた10ある門の6つ目を

タクマも10ある門のうち9つ目まで

爽児は最近10の門を開いた。

でも確信はある。

まだ先がある。

多分一つ一つが才能の壁とかそういう類のものだ。

俺も今年10個目を開いたばかり。

でも寛とやるといつも思う。

「あいつが上手くなるのはあつという間だ。それが今回は精神面の成長がエーちゃんと
の試合できたな。」

と独り言を言つてから俺はなっちゃんの所へ戻り

「おまたせ。」

となっちゃんに伝えるとなっちゃんが

「待つてないよ。荒谷君。なんだつて？」

「宣戦布告。今日は勝つって。」

と俺は少し笑顔を作つて言うとなつちゃんが
「ハルちゃん。悪い顔になつてるよ。」

と笑顔を見せる。

寛との試合

俺はルーティンを終えてコートに入る。

s i d e なつちゃん

今日はハルちゃんに強引にエーちゃんを連れて来るよう言っていたから連絡を入れたら来ていたよ。

荒谷君にハルちゃんの試合。

普通に戦えばハルちゃんは圧勝すると思う。でも昨日の帰り道でハルちゃんは荒谷君はエーちゃんとの試合で成長したつて言つていた。

と思つていると試合は始まつた。

「今日は最初から直感に任せることみたいだよ。」

と思わず声に出していた。

「春樹君の直感のスタイル。」

とエーちゃんもしっかりと見ていた。

試合はとにかく激しいものだつた。

ハルちゃんはまだ一度もポイントを奪われていないにも関わらずだいぶ走らされて
いる。

しばらくするとハルちゃんの目が変わつた。

多分入つたんだ。

第2ゲームの5—0

タクマとの試合と同じタイミングで入つたみたい。

そこからは凄かつた。

荒谷君の全サーブをリターンエースでゲームを取りハルちゃんの勝ちが決まつた。

そして私はエーちゃんに

「ベスト4は表彰されるからエーちゃんもだよ。

ホラツノートは片付けて表彰式の準備しないと」

と言つてエーちゃんの背中を押してからハルちゃんのもとに向かうのだつた。

side 丸尾栄一郎

俺がカバンの所へ行くと誰かがいた。

「あつ！」

ど・・・どうも。」

と言われた。

な・・・なんだこの人!?

人のノートを勝手に!?

と思つていると

「ごめんごめんキミがハルとナツの言つてた「ノートのエーちゃん」君?」
「へ?」

の後、ノートを勝手に見ている人は色々話しだした。

と思つたら携帯が鳴り出して慌てて

コーチによろしくと言わされて去つていった。

その時聞いた名前は

池爽児

テニスの雑誌で春樹君と2人で注目されている高校生のプロテニス選手だ。

第29話

s i d e 春樹

表彰式を終えてコーチの元に集まるとエーちゃんから池爽児と言うワードが聞こえた。

それもそうだ。

大会は間近。

俺に送ったメールでも大会前に1度も 試合がしたいと言っていた。
と思っているとなつちゃんが

「ハルちゃん。」

「どうしたのなつちゃん。」

「そうちやんが帰ってきたね。」

「そうだな。楽しみだ。」

となつちゃんと話しているとタクマがエーちゃん達の質問に答えていた。

「ATGオープンだろ。」

世界の強豪が集まる日本で唯一の大会で春樹と爽児は華々しくデビューするんだ

よ。」

とタクマが説明していた。

他のメンバーも驚いていた。

その後、俺は全日本ジュニアにはプロの大会次第だとコーチに伝え。家になつちゃんを連れて帰る。

そして俺はしばらくS T Cで一日を過ごす為に学校を休む事になつたのだ。

s i d e なつちゃん

「ねえ鷹崎さん。」

「どうしたの佐々木さん」

「最近春樹君を見ないけどどうしたの?」

「来週のATGオーブンっていう大会に出るんだよ。」

「ATG?」

と疑問を持たれた。

「簡単に言うと世界のプロの強豪の集まる大会だよ。そこにハルちゃんともう1人の幼馴染が出るんだ。」

と私が佐々木さんに伝えると

「私も見に行きたいけど行ける?」

と聞いてきた。

「いいけどどうして？」

と聞くと

どうも理由はエーちゃんの試合を見に行つてもわからないからわかるようになりたいのと興味を持つてきたからだそうだ。

今日のSTCでの練習はハルちゃんが一人でAコートを使って三浦コーチと朝から練習をしていた様だ。

私達が着いた時は休憩前の追い込み。やつていた。

エーちゃんもハルちゃんの練習を見て呆然としていた。

確か。

「ねえエーちゃん。

来週のATGオープン行かない？」

「ATGオープン？」

「ハルちゃんとそうちちゃんのデビュー戦だよ。」

「行く！行こう！」

と反応を聞いて私はまたメールで伝えると言つて練習に戻る。

「どうしたハル！・もうへばつたか！」

と三浦コーチに言われる

「まだまだ！・どんどんこいやー」

としんどいながら言うと三浦コーチは笑いながら前後左右に球出しを続ける。

それも10箱連続で。

これが終わつたら俺の練習の1つで

コートに紐を均等に並べて100分割を作つて咄嗟に三浦コーチの言う番号に打ち込むものだ。

こうして時間は過ぎていき体調を万全にしてATGオープン当日に最高の状態を持つてきた。

会場に着くと爽児がいた。

「久しぶり爽児。」

「そうだな春樹。」

とお互に座つた状態だ

「今日の試合。

俺と爽児を見になつちゃんは来るぞ。」

と俺が爽児に言うと爽児は

「なら、何がなんでも負けられないな。」

「そうだな。俺も負けられない。そして」

「2回戦で春樹／爽児に勝つ。」

とお互いの言葉が被る。

そして2人で拳を合わせて

爽児は試合へ

俺はルーティンをする為に外へ行くとなつちやんとエーちゃんに佐々木さんの3人がケバブを食べてるのを見つけた。

第30話

s i d e 春樹

3人に合流すると俺はケバブを1つで買つて話していた。

どうも佐々木さんはテニスに興味を持ったようだ。

エーチちゃんもノートにペンを持つていてる。

現状の実力ではノートもペンも書いたことも無駄になると思うけど。

そしてなつちゃんからは2人と少し離れた俺のルーテインをしようと思つていた場所で頬にキスを受けて

「ハルちゃん。頑張つてね。応援してる！」

と言われているのだつた。

なつちゃんがいなくなつてから俺は少しあの感触を思い出しながらも座禅を組んで瞑想に入つてゐる

緊張をまずは最大限引き上げる。

この試合中に感じる事になる緊張を全ての場面

雰囲気

点差

組み立て

全てをイメージする。

全て出て来たら

全てを消す。

そうしていると爽児が戻つて来る。

「勝つたか？」

「勝つたぜ。後は春樹だな。」

と言われて

「俺は負けない。」

そう言つてコートに向かう。

コートに着いてアップのラリーを相手と繰り返す。

相手は順位だけなら俺より上。でも負ける気がしなかつた。
試合を終えると結果は

2—1

6—0

7—5

6—0

という結果になつた。

挨拶を終えて控え室に戻ると爽児が

「簡単そうに勝ちやがつて！」

と言つてきた。

「簡単じやねえよ！ すげえ疲れた。でもこれでお前と戦える。」

「そうだな。公式戦では中学以来だな。」

「そうだな。」

「それにもハルはすげえよ。」

「なんだよ突然。」

「だつてよ。俺はプロになる為にフロリダに言つたのにナツの為に日本に残つたハルは順位も実力もオレより上だ。」

「僅かなさだよ。」

と爽児と話している時

s i d e なつちゃん

「凄かつたな2人とも。」

「そうだね。鷹崎さん。」

「俺もそう思う。」

「私はハルちゃんとそうちやんの試合も見に来るけどどうする？」

「私はもういいかな。でも試合の楽しみ方とかルールは教えてもらつたからわかつたよ。」

「俺は見に来る。同年代のトップの試合を見たい。」

こうして私とエーちゃんは次の試合を見に来る事が決まった。

side丸尾栄一郎

同年代2人の試合を見て思つた。

テニスでプロを目指したいと。

多分親には反対されると思う。

けどそれでも目指すしたいと初めて思つた。

これから色々と調べて父さん達に覚悟を話さないと。

そう思つて俺は影山にパソコンを借りたりしてプロのなり方やその他色々を勉強し

た。

そして少しして2回戦。

またなつちゃんと試合を見に行くと壁には

若干17歳の2人

池爽児VS清水春樹

初戦はお互にランキング50位台の選手を倒して2回戦に堂々登つてきた。ここ日本の若き2つの才能が今!ここにぶつかる!

と書かれていてその下に勝つと思われる方にシールが貼つてある。

赤いシールが池爽児

青いシールが清水春樹

多分この2人の試合限定なんだろうけどここまで注目されるのは凄いと思った。

第31話

s i d e 春樹

いよいよ爽児との試合だ。

ルーテインは終えた。

他のことも抜かりなし。

なつちゃんも来ている。

ここで俺が負けるのだけは見せられないからな。

s i d e 爽児

春樹。

俺が今まで練習を含めて追い詰めても一度も勝てなかつた相手。

プロになる為にと言つてフロリダに来たけど本当は春樹に勝つ為。

s i d e 春樹 & 爽児

この試合

負ける訳には行かない！

s i d e なつちゃん

私にとつては2人の晴れ舞台。

2人とも応援したい！

「ハルちゃん、そうちやん。

頑張つて。」

私は小さい声でそう呟くだけだつた。

s i d e 春樹

サーブは爽児から始まる。

いきなりワイドに正確にコントロールされたフラットサーブだ。

スピードもキレもある。

追いついて俺は前進して来た爽児の足元にトップスピンを返す。

でも爽児はそのショットに対し一度も止まりライジングで打ち返してくる。

「普段の奴ならあれで点を取れるんだけどな。」

と俺は呟いてラケットを左手に持ち替える。

そして高い起動を描くロブを線上目掛けて打ち上げる。

それに爽児は届かないと判断して下がりバウンドした所を強烈なフラットショットで返してくる。

でも下がつたのならやる事は1つ。

勢いを殺したドロップショットしか無い。

最後尾にまで下がつた爽児は追いつけず先制点は俺に入る。

15—0

爽児の2本目のサーブはセンターからセンターへの最短距離の最速と思われるフラットサーブだ。

ある程度読んでいた俺は追いつきそれをスライスで返してからしばらく俺と爽児のストローク対決に入る。

そのストロークはパワーもそうだが変化も小さいがかけられている。
でも俺も爽児に同じ様に変化をかけたストロークを返す。
しばらくすると爽児がドロップに切り替えた。

爽児のドロップは跳ねる！

そう思つて前進するも爽児のドロップは思いのほか跳ねずに俺はギリギリ空振りしてしまう。

s i d e 丸尾栄一郎

この試合は凄い。

まだお互いに1ポイントずつしか取っていないのに

それにハードショットは凹に使つて本命は2人ともドロップ。
この試合、ノート1冊で足りるかな？

s i d e なつちゃん

2人とも凄い。

いや・・・わかつていたけど本当に置いて行かれたんだと思っちゃう。

そう思つているけどやつぱりハルちゃんとそうちやんの試合は凄くみていて面白い。
ハルちゃんのプレイスタイルにそうちやんのプレイスタイルは恐ろしく相性が悪い。
でもそうちやんはそれをわかつた上でハルちゃんを倒そうと全力を出している。
そしてハルちゃんもそれを分かつているから手を抜かない。

そんな2人の試合だからこそ何回見ても凄いと思える
私はそう思つている。

第32話

s i d e 丸尾栄一郎

第1セットを

6—4

で春樹君が取り

第2セットに入るとあの二人のストロークは激しい撃ち合いのようで打球の種類が全部違つた。

まるで見ている人を魅了するような激しい打ち合い。

お互いにコートをいっぱいに使つてゐる為に少しずつ息が乱れてきているのがわかる。

10分経つも第2セットの点が入らない。

そしてお互いの距離が徐々に近づいていく。

そしてついにボレー戦になつた。先に逃げれば簡単に点は取れるけど逃げると今後は逃げて点を取つた方は事実上、ボレー戦は負けになる。
だからこそお互いに引けないんだ。

少ししてこのボレー戦が終わりになる。

最後は春樹君が強力なボディを打ち込む事でなんとかラケットに当たつた程度の打球はスマッシュには絶好の返球になる。

その打球をスマッシュでクロスへ打つ。

それに爽児君は反応するも届かずに空振りしてしまう。

ここでこのゲームの流れを掴んだ春樹君はそのままゲームを奪う。

第2ゲームは逆に爽児の怒涛の攻めに春樹君が少し着いていけずにゲームを取られていた。

春樹君のサーブゲームでいきなりアンダーのカットサーブを春樹君は見せた。

そのサーブは今まで見てきたものより遥かに鋭く大きく変化をしていた。

そしてこのサーブに爽児君は空振りするしか無かつた。

2本目はキレのいいツイストサーブ。

また跳ね方が鋭くなっているように感じるのは多分気のせいじゃない。

僕とやる時は手を抜いている訳では無いのはわかるんだけど・・・最善を尽くすのと最高の試合をするのはまた違うものだと言うのを第1セットで学んだからね。

それより2本目のツイストサーブは爽児君が一步下がつて確実に強打を打つてきた。でも春樹君はそれを読んでいたのか前進して打球を殺したドロップ。2点目はあっさりと点が入った。

3本目のサーブは初めて見る左でのサーブだ。

右ほど速さは無いけどコントロールは左の方が上みたいだ。

それでも俺よりも速いけど。

と思つているとここでなっちゃんが

「ハルちゃん。ここから直感に任せるとみたいだよ。」

そう言つていた。

左でのサーブが出てから試合の内容がガラリと変わった。

今まで春樹君の計算された上でのプレイだとしたらここからは完全にアドリブの
プレイスタイル。

フォームもバラバラなのにコントロールが乱れない。

あれだけフォームを大事にしていた春樹君らしくない。

俺はそう思う。

でもこれだけははつきりとわかる。

春樹君はテニスが本当に好きで楽しそうにやつている。